九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

第42回九州地区大学一般教育研究協議会議事録

https://doi.org/10.15017/20358

出版情報：九州地区大学一般教育研究協議会議事録. 42, 1994-08-19. 九州地区大学一般教育研究会
バージョン：
権利関係：

3. 研　究　発　表

【1】統一テーマ発表・討議

統一テーマ：「改革の中の一般教育」

〔座　長〕　大分大学　教授　嘉目克彦
〔副座長〕　大分大学　教授　熊谷教子

《研究発表》　一般教育における芸術鑑賞の重要性
～映画文化論（映画鑑賞を主とする）授業の実践から～

鹿児島経済大学　教授　江上芳郎

1．大学教育とは

(1) 大学教育のねらい

1）総合的思考力のある人間の育成

2）豊かな教養のある人間の育成

3）国際的視野をもつ人間の育成

4）自由な判断が出来る人間の育成

(2) 大学教育の内容

1）知育（創造力を高める）

専門教育・専門基礎教育

教養教育・

情報教育（資料蒐集、分析、総合、創造、活用）、

環境教育、国際理解教育、人権教育、

人間教育（生命、哲学、倫理など）、

外国語教育、

コンピュータ教育など

2）体育（健康を保つ）

スポーツ活動

スポーツ教育

スポーツ鑑賞

3）徳育（感性を高める）

芸術活動（絵画、彫刻、器楽演奏、歌唱、演劇、映画など）

芸術教育

芸術鑑賞

○「専門教育・専門基礎教育」以外は一般教育である。

○ハーバート・スペンサーHerbert Spencer(1820－1903)は、学校教育は知育、体育、徳育がバランスよく行われなければならないと述べている。

2．映画文化論（映画鑑賞を主とする）の開講

大学における徳育教育の強化を意図して、平成4年度から「映画文化論」を開講した。

(1) ねらい

映画鑑賞を通じて人生を学ぶ。映画は芸術であり、文化遺産でもある。この映画の鑑賞を通して、監督が意図したテーマ、即ち、人間の生と死、個人と国家、家庭と社会、科学と宗教、戦争と平和等について、学生に考えさせ、彼らの教養を高め、感性を豊かにさせる。

(2) 方　法

ビデオ映画を上映して、鑑賞させ、感想文を書かせる。これを次の時間に講評する。映画についての解説資料を予め配布しておく。

(3) 理　由

1）ベラ・バラージュは、既にその著「映画の理論」（1945年、佐々木基一訳）の中で、映画芸術の教育が学校教育において、一般教育として教えられなければならないと主張してる。

2）大学審議会は「大学教育の改善について（答申）」（平成3年2月8日）の中で、次のように述べている。

「学生の学習意欲の向上を図り、学習内容を着実に消化させるためには、大学の側において、教員の教授内容・方法への取組（ファカルティ・デベロップメント）・・・などを積極的に推進する必要がある。」

映画を教材として使用し、学生に鑑賞させることは、教授内容・方法の一つの工夫ではないかと思われる。

(4) 本年度前期に取り上げた映画

① レインマン（米、'88，ダスティ・ホフマン、トム・クルーズ）

② カサブランカ（米、'48，ハンフリー・ボガード、イングリッド・バークマン）

③ 二十四の瞳（日、昭28，高峰秀子、笠知衆）

④ 慕情（米、'55，ウィリアム・ホールデン、ジェニファー・ジョーンズ）

⑤ ローマの休日（米、'53，グレゴリー・ペック、オードリ・ヘプバーン）

⑥ 裏窓（米、'54, ジェームズ・スチュアート、グレース・ケリー）

(5) 上記映画に関し、学生に対するアンケート調査の結果

1）上記の映画を初めて見る学生の割合と当日出席学生数

① 60.5%（299人） ② 96.2%（287人） ③ 78.2%（285人）

④ 100.0%（266人） ⑤ 52.4%（273人） ⑥ 92.8%（278人）

2）上記の映画に対する学生の評価 (%)

評価 / 映画	5．大変良かった	4．良かった	3．どちらでもない	2．良くなかった	1．大変良くなかった
レインマン	70.5	27.8	1.7	0.0	0.0
カサブランカ	52.9	38.0	8.4	0.7	0.0
二十四の瞳	52.3	40.7	6.0	1.0	0.0
慕情	31.6	52.6	13.2	2.6	0.0
ローマの休日	72.6	26.7	0.7	0.0	0.0
裏窓	38.6	53.3	5.1	2.0	1.0

(6) 学生による感想の二・三の例（カサブランカの場合）

○ 外国映画の良さをまた思い知らされた。

○ 来週に備えて仏と独の歴史を勉強してきます。

○ 戦争の悲惨さを痛感した。

○ 「君の瞳に乾杯」と言うセリフを一度使ってみたいものだ。

○ モノクロ映画は初めて見たが、良かった。

○ 祖国を愛する気持ちは皆一緒だと思った。

○ 映画を見ることが殆どないので、映画の良さが分からなかったが、この授業で、映画の良さが少しずつ分かってきたような気がする。

○ 先週のプリントに自分の名前が出ていたが、これからは、しっかり感想を書こうと思う。

(7) 問題点

1）経費や使用の簡便さなどから、35ミリや16ミリの映画フイルムよりも、映画ビデオを使用するほうが良い。ただし、その使用に際しては、著作権について十分配慮する必要がある。

2）スクリーンを備えた教室であることが望ましい。

《研究発表》　　学生の海外研修について
－中国文化研修プログラムを中心に－

九州女子大学　講　師　　方　　如　偉

はじめに

本稿は九州女子大学、九州女子短期大学（以下九女と省略する）が1993年に実施した中国文化研修のプログラムについて検討し、企画の動機、企画原則及び具体的な研修方法、研修内容をも吟味してみたい。この作業を通し、如何にすれば海外研修の効果が得られるかという視点に立って、大学の国際化、価値観の多様化を求める大学教育としての海外研修の改革を訴えたいと思う。

1．九女の海外研修について

昭和58年にスタートしたアメリカ文化研修は、平成２年にイギリス文化研修に変更した。どれも英会話に重点を置く研修プログラムであるため、英文科の学生がほとんどである。

平成４年に「アメリカ、カナダ言語文化」、「イギリス文化」、「ヨーロッパ音楽」、「中国文化」等４コースも実施されたが、事情で筆者が関わった中国コースだけ取り上げさせていただく。

2．中国文化研修の目的について

中国研修は企画の当初からはっきりと「語学ではなく、文化の研修、文化的な研修」と言う方針に決めたのである。

それを説明するには、例えば英会話を中心とするイギリス研修と比較してみよう。

イギリス研修が英会話を重点にしたのはやはり世界中に通用する英語だから。中学の時から６年間も習ったし、大学でも英文を専攻しているから。そして、英会話ブームと一般の日本人の心に秘められている欧米崇拝の感情にも多少関係があるのではないかとの指摘も多い。

一方使用地域が限定される中国語は、いままで習ったこともがない。中国語は必須の第２外国語であるだけに、本気に中国語をものにしたい学生の数もほんの僅かであろうと思う。事前の調査で中国へ行きたいと答えた者の多くは国文学科の学生であるところから、中学高校時代に覚えた漢文、大学での書道、東洋文学等科目の影響ではないかと考えられる。彼女たちにとって、中国語よりは寧ろ中国の歴史、文化遺産に関心が高いようである。もう一つ比較したいのは、両者の社会的な認識、受け止め方の違いことである。あっちこっちに建っている英会話スクールとは対照に、授業料を払って中国語を習うものは少ない。そして年配の方が断然多いことも。カッコーのイイ英語とは対照的に、中国語を習うのが爺臭いと言われたことさえあるそうだ。

上記のことをよく考慮し、われわれは中国文化研修の目的を「アジアの一員である日本の若者達に、もっと身近な中国文化を知り、本当の中国を理解してもらうため、社会勉強の機会を提供する。」

1）にした訳である。

3．中国文化研修プログラムについて

午前、大学で集中講義、午後は社会見学。

「中国総合文化講座」（特に日本と関連のあるもの漢詩、行事、仏教等）

中国食文化－ 四大料理の特長とその地域性、料理からみた中国食文化、上海屋台料理。

東洋魔都－上海植民地史話、庭園文化（できれば、蘇州に同行）、武術講座。

また上記講義の延長は体験学習、現地実習として午後の社会見学に入れる。

歴史遺産、東洋文化：博物館、美術館、画院、少年宮、中小学校、少年の家等、

市民の家庭、市場、劇団、映画制作所、放送局、ファシュンショー、武術：太極拳、剣舞刀舞演出。

早朝太極拳習い。

実践料理講座：二－三回ほしい。餃子作りと上海料理二、三品。（大教室で全員参加）

中国大学生との交流会、懇談会、懇親会（できれば、教室と宿舎まで案内してもらう）」

この研修プログラムは次の原則に基づいて考えたのである。

1）語学よりも文化的な研修を強調し、悠久の中国文化の特色を強く打ち出すこと。

2）研修テーマはアカデミックなものよりも、身近で親しみそうなものを選ぶこと。

3）集中講義、実習、交流会、家庭訪問、現地視察等なるべく多くの研修方法を採用すること。

終わりに

中国研修は「文化の研修である」ことを強調している。そもそも「文化」というのもなかなか捉えにくい表現である。語学は勿論文化であり、一国の歴史遺産、倫理哲学等、およそ社会生活、人間の営みすべては「文化」という言葉で包括できると思う。

その意味で、中国研修は哲学等アカデミックなテーマを避け、食、生活という身近で親しまれそうな話題を研修のメインテーマにしたのは良かったと思う。学生達の研修レポートでもこれを十分に反映している。2) その意味で、プログラムの善し悪しは海外研修の効果、研修の成敗はに関わるといっても過言ではないと思う。

世の中「国際化」と叫ばれる今、海外研修が盛んに行われている。しかし単なる遊び、観光に終わってしまうケースもあると思われる。

問題は大学教育の一部として（単位出す等）行われる海外研修は、如何にすれば、その教育効果を求めるかのところにある。多様な価値観を求める海外研修は大学の国際化、活性化へ近道であることは一般に認識されつつあり、広く活用されているが、研修プログラム企画等肝心のテクニック、手法に関しては、まだ十分に開発されていないし、それに関する研究、調査もすくないようである。

注：

1．（林宏、柳田省三、方如偉、「中国文化研修提案」により）

2．別冊「中国文化研修報告集」で詳しく報告されているが、ここに学生レポートのテーマだけを紹介しておきたい。「日本人と中国人」、「中国の伝統文化と日本」、「中国トイレ事情」、「中国料理について」、「（中国の）生活」、「（中国の）食」、「中国の学生について考え」、「本場の中華料理について」、「中国庭園文化」、「中国料理について（写真つき）」、「上海で學んだこと」、「中華料理について」、「上海とヨーロッパの関係上海植民地歴史」等。ほか「中国文化研修を終えて」「中国研修に参加して」という共通テーマについてレポートしたのは５人。

資料１

中国事前研修会で帰国後の研修レポートについてのアドバイス

貴重な海外滞在期間中を如何に面白くしかも有意義に過ごすか、また帰国後の研修レポートのためにも、出発前に関心を持っているテーマについて「調査研究計画」を立てみませんか？

例１：本場の中華料理について調べたい。

目的：現地での料理講座等を通して、中国食文化を検討する。

方法：研修期間中、朝、昼、夕三食すべてのメニューを集める。

華東師範大学主催の料理講座に参加する。

市民の家庭で本場の家庭料理を体験する。

準備：予備知識として関係の本を一通りに読んでおく。カメラ、ビデオ、録音機を持っていく。

例２：中国人の生活について

目的：現地での生活体験を通して、中国庶民生活を知る。同じ東洋文化圏と言われる中国文化と日本文化の相似点を見つけだす。

方法：一般市民の家庭で一日中滞在する。現地の若者との懇談会、昼食会等に参加。

自由市場、デパート、喫茶店等に出かけてよく調べる。

例３：中国教育事情について。方法：大学のカリキュラム等を集める。

小学校、少年宮等を見学する。現地の学生、先生にインタビューする。

例４：中国武術について。 華東師範大学の武術講座に参加。早朝公園等に出かける。

中国で武術映画ビデオを鑑賞する。図書館等で資料を調べる。武術のビデオ、図書を買い持ち帰る。

参考テーマ：

5　古い都と政治の中心ー北京　　6　近代化へ進む上海ー光と影

7　庭園芸術の粋ー蘇州の庭園　　8　無錫人形研究所を訪ねて　博多人形と比べて

9　中国四大刺繍について　　10　中国の社会教育　ー文化宮少年宮を中心に

11　本場の餃子を味わって－中国食生活のあれこれ　　12　中国人の文化生活－上海劇団を訪問して

13　中国食生活について－上海屋台体験レポート　　14　現代中国若者について－勉強と遊び

15　大学キャンパススケッチ－華東師範大学を中心に

テーマの設定、調査の方法等についてご相談にのります。二人のまた数人のグループによる共同調査もよい。但し、レポートは異なったテーマが望ましいことから、お互いに現地で集めた情報（メモ、写真、ビデオ等）を交換するのが理想的ではないでしょうか？

資料２

大学、短大の教務委員会に提出した単位申請書。

教務委員会殿：

「中国文化研修」の案は12月７日の教授会で承認されました。

従いまして、下記の通りにこの中国文化研修ための単位認定を申請いたします。ご審議のうえ、ご承認を賜りますようお願い申し上げます。

記

科目：国際文化　　担当：本学教員

方式：集中講義と演習（現地見学等も含む）

時間：２週間　　場所：中国の大学等

単位：２単位

対象：この中国文化研修に参加する大学、短大生全員。

科目紹介：

「中国総合文化講座」

中国伝統文化概略、近代史における中国と日本、学問の神様－孔子と中国教育制度の起源、歴史の都－北京、東洋魔都－上海植民地史話、呉越逸話－呉太伯と無錫、蘇州から見た中国庭園文化、中国人漫談－北京人と上海人、料理から見た風俗習慣、中国文化と日本文化、中国古典名著漫歩、他中国武術、中国音楽、書道、美術、料理、服装等。（人数と大学の都合により、上記内容の一部を開講することもある）

更に学生の専攻科目と人数により、書道班、音楽班、体育班、料理服装班等クラス分けも考えている。

また、上記講義内容の延長として、

少年宮、学校（社会教育）、博物館、美術館等（東洋文化、書道）、劇団（中国民族服装）、家庭と市場（現代中国）、万里の長城（古代史）、故宮博物館（近代史）、蘇州庭園（呉文化、庭園芸術、）無錫（呉文化）等の内容もたくさん盛り込まれている。

中国文化研修部会　林宏、平田トシ子、方如偉

《研究発表》　　一般教育における個人の尊厳の確立　～英語教育の場合～

大分大学　助教授　　松　下　秀　峰

大抵の人が、教師と呼ぶのにふさわしい教師を、数人思い出せるのではないだろうか。彼らは、優しく、何かにつけ生徒を勇気づけ、自信を与えてくれた。もちろん、叱責したこともあろう。恩師たちは、生徒の人間としての尊厳を認めた上で、長所を引き出したのだと思う。またこの個人の尊厳は、究極的には、存在そのものの尊厳に通じていくものでありたい。拙論は、その確立に努力している筆者の授業報告である。

本題を設定した理由は3点ある。第１には、現行のわが国の教育が、若者の欠点の指摘（これ自体は欠かせないが）のみに終わり、結果的に、少数の「エリート」を除いて大多数の彼らの自信を喪失させがちなことがある。第２に、英語教育が異質な言語の教育であるにもかかわらず、そのことに無意識になり、外国語教育の利点を忘却しているのではないかと思われる点がある。第３は、第２の理由から、その根底にあると推測されるもので、「英語でも教え得るもの」と「英語でしか教えられないもの」（この両視点は、「〈外国語でも〉と〈外国語でなければ〉の両方にこたえることができるようになった時、はじめて外国語教育の目的が十分になったということができるのである」〈日本教職員組合編：『日本の教育』19〉の該当部分を英語に限定して言い換えたものである）が峻別されていないと考えるからである。以上の理由に基づいて掲げる目標は、「学問が真に社会的に意義あるものになるための今日的なテーマの発見も、一個の人間がそれぞれに生きているということの絶対的な意味にかかわらせないかぎり、行われないのではないか」（内田義彦：『学問への散策』）に共鳴し、その関係づけに努力することである。個人あるいは存在の尊厳を、できる限り、その長所において見いだしたいからである。以下、授業について３点報告したい。

第１は、授業そのもので、教材の分析、その結果の発表と合評会の開催である。教材は、ほとんどが、映画あるいは映像化された作品とそのシナリオである。これらの教材が、英語が普通、自然に用いられるほとんどすべての状況（場面、事件、音声、人物とその演技とテーマも含めて）を備えていることを再発見したからである。具体的には、以下のよう作業を学生たちは行う。

まず、当然のことであるが、個人的な予習が基本である。前もって、脚本の範囲（テーマを選び出せる程度に）を指定して、その部分の映画あるいは映画全体を通して１度見せる。次に、課題として、全員にその範囲を分析させ（図解、関係図の作成、ミニ・エッセイの構想を経て）、ミニ・エッセイ（400字以内）を書かせる（資料①）。ここでは、自分の言いたいことを過不足なく、論理的に、わかりやすく述べることが指導の目標である。授業では、２名の学生に、分析の結果を口頭発表させる。この時点では、分析の印刷物はまだ配布されていない。聴衆はメモ用紙に、書かれている項目に答える形で要点を書き取る。発表者は聴き取りやすいように、そのエッセイを書いたかどうか、２回の評価のうち、第１回目を受ける。「良いスピーチかどうかの評価は、それが発表

後《わかりやすく》「報告」できるか否かである」（“The test of a good speech is whether it can be ‘reported’ or not.”— Rose Bruford: Speech and Drama)。発表の仕方も同時に指導する。メモの処理については、書き上げた直後に全員で書き取ったことを確認したり、回収して発表したりする。しかしその扱い方は模索中である。その処理後に、印刷した資料を全員に配布し、合評会に移る。最初に、聴衆から質問を受け付けるが、あまり質問は出ない。もう一工夫必要である。その後、2～4名の学生に、提出されたレポートの優れている点のみを指摘させる。最後に、教員が一応短所も批判してから、長所に焦点を当てて、褒め上げる。そして、それぞれのテーマを結びつける（“Only connnect.”— E.M.Forster)。この後、学生の実技とビデオ鑑賞を行う。さらに、発表者のレポートをより精密に検討させるために、宿題として、評価表を 配布し、評価させる（資料②）。これが第2回目の評価で、最終的には論文の書き方の指導を目指している。提出された宿題の成果をどのように全体に還元するかは、 思案中である。実際、すべてのレポートがそれなりの長所をもっていることは、本当にすばらしいし、喜ばしい限りである。学生に教えられることも多い。本学部の阿久根求教授は、「Positive Focus の効果」（1979年）と題した論文を書かれ、若者を肯定的に焦点を当てて評価しようと提唱されている。

第2は、「英語でしか教えられないもの」ついて考えたい。この面の作業を欠いては、「英語でも教えられるもの」、つまりあらゆる教科が抱える、共通の普遍的な課題の追究に終わり、何のための英語学習か分からなくなる。教科の存在理由・主体性（アイデンテイテイ）を失ってしまうだろう。また逆に英語学習もこの普遍的な課題の追究を忘れてしまっては、教科のエゴイズムを非難されるだろう。両者の緊張関係こそが、決して容易ではないが、肝要なのである。

「英語でしか教えられないもの」とは、まず、レポートの中に書き加えられた「キースピーチ」、あるいは「キーセンテンス」である。それらは、4段階の作業（上述の3段階の作業に加えて、エッセイの日本文－英語の論理を介入させて書かせる日本文のキーセンテンスーの英訳）を行った後、あるいはスキットを演じてから、いわば、内容と形式の「結晶」として析出される一種の名文である。選定の基準を、前段階の作業に加えて、またそれらをまとめる形で、内容（特に、次項の「異質なもの」を含む）と語法の観点から考え、その文が独特で、微妙な結合を示していることに置いている。資料②として付した『カサブランカ』から例を挙げよう。冒頭の解説の終わり、出国の機会を待ちわびる人々を表現した、“But the others－wait in Casablanca－and wait－and wait－and wait . . . .”（学生はキースピーチとしてこの部分を挙げた）が印象的だ。単音節で、脱出のための旅券を待っている意の“wait”（キーワードの一つ）が4度繰り返される。その単調な、ものうい反復 —— “and” とともに —— が、空しい響きを伝え、彼らの出国の努力も徒労に終わる可能性を暗示する。本映画の台詞の白眉、“Here’s looking at you, kid.”（君の瞳に乾杯）は、リックとイルザの愛と別れを語り、簡潔な原語の英文、日本語の名訳ともに、「永遠の」名台詞であろう。

第3は、ミニ・エッセイのテーマについてで、それが個人、あるいは日本人にとって同質（「HO」）

か異質(「HE」)かという問題である。その判別の目標は、まず「(人間の)個人の尊厳の確立」、そして日本人としての民族性をより意識し、客観化し、対象化することにある。ここで言う民族性とは、最も長い年月過ごしてきた風土、社会、言語、風俗習慣の下で養われて、刻みこまれた、場合によってはナショナリズムへと変わり得る段階の素朴な民族的な性質と考える。民族については、当日会場で異論が出された。また個人と民族の差異も口頭では「集団同調主義」の弊害にはふれるが、普通は学生にはあまり意識させていない。今後の課題として、ぜひ考えてみたい。

ケンブリッジ大学名誉教授のL.C.ナイツ氏は筆者の「異文化受容の態度」と題したミニ・エッセイに、"Only with our centre established can any study of foreign literature and cultures be fruitful."(私たちの主体性が確立したときに初めて、外国文学また外国文化の研究も実る)とのコメントを付された。この"centre"は、民族的(あるいは国民的)主体性、さらに個人の主体性をともに含んでいる。拙論では、民族の主体性に取る。異民族の理解においても、まず自身の民族としての主体性が確立して初めて、あるいはその努力を継続している間、他者の民族性へもより容易に入っていける。そこに生じる確執あるいは抵抗を克服しようとする闘いが我々の精神を活発にし、問題意識を深化し、先鋭化し、自他の深い理解を可能にするからである。

同質の場合は、このテーマについては異民族でも同様の、変わらない対応を示す、つまり同じ人間だという確認か再確認を意味する。既述のキースピーチはこの場合である。他方異質と判断した場合は、さらに二つの態度を考えている。一つは、文化相対主義に近い"Differential Coexistence"(差異を生かしながらの共存ー英語の表現"agree to disagree〈or differ〉"も同様の意味であろう)である。差異(異質な要素)を排除せずに、寛容な態度でそれを認めることは、我々日本人のきわめて苦手なものに属するだろう。もう一つの場合は、反文化相対主義の一面をもっているだろう。異文化(異質な要素)と自文化の統合、すなわち"Integrative Behaviours"(統合的な行為)である。この考えは、ナイツ教授の筆者への私信で教示していただいた(『英語青年』第137巻4号、1991年7月号)。異質な場合、差異を生かし共存するか、統合をするかの困難な例が戦争と平和のとらえ方である。イルザの夫・ラズロによる、"We might as well question why we breathe. If we stop fighting our enemies, the world will die."(リックの"Don't you sometimes wonder if it's worth all this. I mean what you are fighting for."に対する答え)に、それが見られる。「闘うことが生きること、呼吸をすることと同じだ」は、我々が現在持っている人生観とは鋭く対立し、異質である。結論的には、ジョン・オブ・ソールズベリーの"Who is more contemptible than he who scorns a knowledge of himself?"(自己認識を軽蔑する人ほど軽蔑に値する人がいようか?)をかみしめ、個人の尊厳の確立へ一層努力しよう。同時に、K.レービットの批判も忘れずに、インド人の理想である「〈汝らはわれらであり、われらは汝らである〉」(中村元)を根本に据え、「西欧的な力動性と中国的な安定性とがちょうどよい比率で配合され」(谷川徹三)るように、個人の尊厳の確立との両立へ向けて進んでいきたい。

1

資料①　*HO*：2つの運命

舞台は、第2次世界大戦下のフランス領モロッコのカサブランカ、(1)アフリカ北部のこの国で、一体何が起こっていたのだろうか。

カサブランカは、自由の国アメリカへ旅立つことのできるリスボンに向かう亡命者であふれていた。しかし、転出査証を手に入れなければリスボンへは行けなかった。(2)街では、相対する運命をもつ者が共存していた。世間のことに無関心な人のいい中年夫婦と、彼らに悪い奴らに注意しろといいながら、スリをはたらく男、転出査証を手に入れられず捕らえられ、殺された人、このように、お金や権力のある者は幸せで、そうでない者は生きることさえ困難な状況は、金で戦争を起こした、一部の軍国主義者が作り出したものであり、罪のない多くの人間の運命を変えてしまったのである。

幸運な者とそうでない者を生み出す戦争はもう二度と起こしてはならない。(原文のまま)

2

資料②

Note Paper for Listening Comprehension

(聴き取りのメモ用紙)(学生の答えはすべて原文のまま、質問事項はその後少し変えている)

Ⅰ. Contents：

Write down key words or key phrases or key sentences.

① The Presenter's Name: _____

Title：*Two デスティグ*

(1) *What of earth to going to this town Africa*

(2) *People who have give together in town*

(1) *Pahaps ——tomorrow*

(2) *The others wait kasaburanka an wait an wait an wait.*

Ⅱ. 口頭発表された日本語のミニ・エッセイについて：

A. 内容：発表者の主張したこと(キーワードあるいはキーフレイズのみ)と

3

形式

1. テーマ（英文のテーマの日本語訳）：2つの運命

2. 本論：

a. 序論：第2次世界大戦中カサブランカで何が起こったか

b. 展開：お金や権力がある人は幸せ。そうでない人は生きることさえ困難。町では相対する人々が共存していた。

c. ユーモア(転)：「お気を付けなさい」という人がスリをはたらいているところ。

d. 結論：幸福な人とそうでない人を分ける戦争をもう起してはならない。

B. その他の発表態度：番号を○でかこんでください。

「3」は普通、「4」は良い、「5」はたいへん良い、を表わす。○でかこんでない場合は、その後、追加したものである。

4

1. 発言時間の厳守　3　4　⑤

2. 声の大きさ　3　4　⑤

3. 聴衆の反応への注意(アイコンタクトを保っていたか——聴衆は反応したか)　3　④　5

4. 説得の姿勢　3　4　⑤

5. 日本語の正しさ、明解さ、切れ味と感じ良さ　3　4　⑤

6. 質問者への誠実な対応　3　4　⑤

Ⅲ. 日本語のミニ・エッセイについて：

A. 書かれた日本語について

1. 正しさ、明解さ、切れ味と感じ良さ　3　4　5

2. 文の簡潔さ　3　4　⑤

3. 1文の主語と述語の対応　3　4　⑤

4. 段落の適正さ　3　4　⑤

5. 展開の論理的な発展生

5

3　4　⑤

B. 本論

1. 展開で、原文の要約がなされ、それについての発表者の意見が書かれている。あるいは、意見が原文によって根拠づけられている（主観的な文章に終わっていない)。　3　4　5

2. テーマに対して、「HO」(日本人あるいは自分自身が持っている要素と同質な場合)と書き込まれているか。

書き込まれている。幸福な者とそうでない者に言いかえて説明を加えている。

3. テーマに対して、「HE」(日本人あるいは自分自身が持っている要素と異質な場合)が書き込まれているか。書き込まれて場合、以下のどちらかに分けて問いに答えていただきたい。

a. 「相違を認めながらの共存」("Differential Coexistence") がどのような形で確認されているか。

書き込まれている。しかし「相違を認めながらの共存」の確認については行われていない。

6

b. この場合、異質なものと日本人、あるいは自分自身が持っている要素とがどのような形で統合 ("Integrative Behaviours") されているか。

異質なものとしては、街では相対する運命をもつ者が共存していたことである。この状況は日本では考えにくい。

4. 発見あるいは再発見があるか、あるとすれば、それはどこか。

戦争が幸運でない者とそうでない者を生み出すというところ。

5. 既存の知識の追求が、どういう形でなされているか。

戦争は罪のない多くの人間の運命を変えてしまうものである。その戦争を「もう二度と起こしてはならない」と最後に結論を述べることによってされている。

6. 真理へ謙虚である。　3　4　⑤

7. 柔軟な知性("flexible intelligence")を持っている。　3　4　⑤

7

Ⅳ. ミニ・エッセイのキーセンテンスの英文について：（英訳の例は削除）

A. 英文に問題点はないか。

ない。

B. 日本文の直訳的な英文になっているか。

なっている。

C. 英語に対応する日本文は論理的になっているか。不要な日本語はないか。

ない。

《研究発表》　　大学における一般教育の意義と可能性について

大分大学　教　授　　山　岸　治　男

それを、もし教養教育と言い換えることができるなら、一般教育は必ずしも大学の占有物ではない。他の段階の学校教育及び広く社会教育の領域でもその意義と可能性が問われるものといえる。一般教育がおびているそうした幅の広さ・層の厚さを念頭におきながら、ここでは、とりわけ大学における一般教育の意義とその可能性について探ってみたいと思う。

1．教育論からの探究

教育については、哲学、心理学、社会学等、さまざまな視点から定義が試みられるが、それらに共通する部分を要約すれば、主体の変容・変革を助ける人間の働きかけということになろう。ところで、人間の変容は、人の意思の関与という点から次のように区分することができる。1）エイジング（Aging）に伴い、自ずとそうなる変容、2）エイジングの過程で、人や社会や自然と接し、経験を累積することによって無自覚に又は自覚してそうする変容、がそれである。前者は、人の自然的存在の部分としての肉体の変容がその典型例になる。後者は人の社会的・心的・精神的存在としての地位や性格・人格等の変容がその典型例になる。

このように見て来ると、教育は、広い意味でとらえた場合、1）の変容と2）のうちの無自覚にそうなる変容があることを見据えた上で、環境条件（人・社会・自然およびそれらの所産）の制御を通して、そうなる方向を、より望ましい方向に向けようとする行いであることになる。例えば、エイジングに伴う筋力の低下は自然の現象ではあるが、もし、栄養やスポーツに関する知識をもってそれを実践すれば、低下の速度がかなり制御されることもまた確かである。失敗経験は一般に希望の喪失を引き起こしやすいが、それを冷静に見つめ、失敗原因を筋道正して分析し、かつ、努力して失敗を克服することの意義を学習していれば、それは逆に成功へのバネにもなるのである。

他方、教育を狭い意味からとらえる場合、2）のうちの自覚的にそうする変容がここに区分される。この場合もまた、より望ましい方向への自覚的変容を助ける行いが教育の名で語られる。

こうしてみると、教育論はその核心に望ましさという価値観の問題を内包していることが判る。この場合、望ましさの問題は教育の目的・内容・方法のすべてに伴うが、では、一般教育にはどんな価値観（望ましさ）が託されているだろうか。

2．一般教育に寄せられる期待

筆者が大学で耳にする範囲に限定すれば、一般教育に寄せられる期待ないし意義は次の2つに集約される。1）専門教育の準備として、2）人間（近代市民社会の構成員）に必要な教養として、の2つがそれである。

1）の場合、一般教育の目的は専門科目を学ぶための基礎学力の習得にあることになろうか。教育の内容・方法もこれにあわせて選択されるであろうから、一般教育は全体として専門教育に統合され、その下位部門に位置づけられる。

2）の場合、一般教育の目的は専門教育の下位部門化することなく、労働や思索、くつろぎや芸術等、さまざまな活動を広い視野に立ち、深く冷静な分析・評価枠をもって見極める能力と知的習慣を修得することにおかれる。

両者のちがいは1）が定められた専門教育（医学・工学・法学教育等）の目標に集約されるのに対し、2）が目標そのものの思索に眼目をおく点である。例えば、作物の立枯れを防ぐ農薬の開発という目標を定めた場合、これにそった勉学は1）に類する。他方、農薬の使用が土壌や人体に及ぼす影響について学ぶ必要があることや、人間の欲求・欲望と環境との関わり方等について学ぶ必要があることに気づいたのは2）の教育の成果といえる。

こうしてみると、一般教育には、1）の期待はもちろん、2）の期待、即ち、わたし達が自然・社会・人という環境条件のもとに、自己とそれらをどう関係づけながら暮らし、生きていくかを主体的に考え、判断し、実践する能力を身につけるという期待が寄せられていることに気づくのである。

3．一般教育の可能性

こうしてみると、一般教育には必ずしも専門教育に統合されてしまうのでない教養教育としての重要な意義と可能性があることに気づく。科学の歴史をひもとくなら、今日、それぞれに専門分化した科学も、人間がその生活環境との関係のもち方を変更する過程で、従来の認識枠に対して批判や反省を加え続けた結果として生じたものであることがわかる。この場合、批判や反省を内発する上で力になるのが教養教育としての一般教育なのである。一般教育は、従って今日ますますタコツボ化・狭隘化しつつある専門科学を再び相対化しこれまでとは異なる視角から再編するヒントを与えることにもつながるであろう。

では、こうした可能性は、なぜ、これまでのところ必ずしも十分には開花しないでいるのだろうか。筆者の管見に従えば、それは一般教育が大学のカリキュラム全体の中で予備的位置におしやられてしまっていたからにほかならない。「一般教育の単位は3系列のどれかをとりあえず36単位分とる」というのが入学したばかりの学生にとってキャンパスで受ける最初のオリエンテーションなのである。大学生活に慣れた頃にはなぜ、どんな可能性を秘めて一般教育の単位を取得しようとしているのか、ほとんど考えることも実感することもなく時をすごしてしまうというのが実情であった。

とすれば、一般教育は不要なのではなく、大学のカリキュラムにおける位置づけ方に留意してなお続ける必要のあるものである。しかも、それは、大学時代のわずかな年月の間にだけ関心を注ぐものではなく、人の生涯にわたって問われ続けるべきものでもある。私たちは、時々自分が今行っているものごとの渦中において、自らの行為の全体像を冷静につかむ知的な操作をする必要がある。

この操作が正しく行われるためにはどうしても教養としての一般教育が必要である。

4．可能性を具体化するには

一般に可能性は、現実に直面しながら選択する方法・方途の適・不適によって実現の度を異にする。では、これまでに記した一般教育の可能性をこれまで以上に高い水準で実現するには、当面、何が問われるであろうか。

一つは、授業の工夫である。人類のこれまでの知の探究過程で累積された知識・技術をそのまま伝達しようとする授業では学生に問いが内発しない。知的探究活動は問いが内発した時にこそ、問いに対する「解答の旅」としてはじまるであろう。探究活動には、強い興味・関心が不可欠である。それを支えるのが問いの内発である。したがって、一般教育の授業では、定説としての知見を伝達するのでなく、知見に向かう旅立ちを促す内容と方法をこそ工夫・選択すべきである。

第二は、カリキュラム編成上の工夫である。一般教育を１～２年ですませることを原則とするカリキュラムは一般教育を専門教育の下位教育としてしか考えていないことを物語る。教養教育としての一般教育は、記したように、生涯にわたって必要なものである。したがって、在学する全期にわたって受講するよう原則を変える必要がある。

三つめは、授業時数等のスタイルに関する工夫である。15コマ２単位という型にこだわらず、学生に問いを内発させるという一点に集約して方法を探ることである。例えば、一般市民も交えた終日にわたる討議法を導入してもよい。逆によく組織だてられた授業であれば、１コマであっても不十分な授業数回分をしのぐ効果があり得る。学生に問いを内発させるインパクトを与え得るか否かに担当者は意を注がなくてはならない。

もう一つつけ加えるなら、一般教育には、最終的に学生に自己の現存在に自信をもたせ、将来における自己と生活環境との望ましい相互作用の歩み（人生）をみつめ自由な発想と責任（思慮）ある判断をもって実践する意欲を湧き出させる工夫が必要である。それには厳しい言い方になるが、大学教官自身が実践と思索の日々をすごすことが問われていることに気づかなければならないであろう。

《研究発表》　コア教養科目等による構造的な教養教育の創設について
――活性化とスリム化の両立をめざして――

九州大学　教　授　　森　　俊　洋

はじめに

大学設置基準の大綱化に伴う省令改正以来、この2年間にわたって、九州大学では全学教育改革の一環として、教養部の廃止並びに改組転換を伴う、4年ないし6年一貫カリキュラムにおける一般教育を中心とした大幅な改編をめざして、全学的な検討を積み重ねてまいりました。この間、とりわけわたしたち現教養部のスタッフにとって最大の難問は、新設および概設部局への移行、学部もしくは大学院教育の新たな責任分担の増加といった事態から、当然要請される教養教育の負担削減というきわめて厳しい条件のもとで、形骸化が指摘されて久しい従来の一般教育の改革をいかにして遂行すべきか、つまり、一般教育の充実活性化とスリム化を同時に満足させるようなカリキュラムの改革はいかにして可能となるか、ということでありました。

この難問に対して今回わたしたちが出しました答案は全体としておよそ次のような枠組みをもちます。①「教養教育科目」として内容ならびに履修方式において異なる三種類の科目（「コア教養科目」「周辺教養科目」「高年次教養科目」）を設け、これらを他の諸科目（言語文化、健康・スポーツ、基礎科学）とともに「全学共通教育科目」として位置付ける。②全学共通教育の運営にあたるとともに大学教育のあり方を研究する「大学教育センター」を新たに設置する。③全学共通教育の実施にあたっては、従来の教養部教官による固定的な担当を廃止して、教養部からの移行定員の数に比例して各部局が担当の責任を負う全学協力分担方式を採用する、というものであります。

一般教育については、まず、これまでに類を見ない全く新しいタイプの授業科目である「コア教養科目」を必修もしくは選択必修科目として教養教育の中核に据えました。そして、このコア科目を補強する意味で授業内容ならびに形態・方法において多様な選択科目として「周辺教養科目」を置き、さらに、教養教育のいわば完成をはかる意味で新たな「広域選択方式」（一定数の単位について全学共通教育科目の中から科目区分にとらわれずに自由に選択できる）にもとづく「高年次教養科目」を配置しました。以下、ここでは、今回の改革において教養教育を構造的なものとして、活性化とスリム化を同時に可能にさせました「コア」および「周辺教養科目」について報告させていただきます。

1．コア教養科目は、かってのわたしどもの教養部を教養学部へと改組する試み以来、アメリカの大学におけるCORE（共通必修科目）あるいはINTEGRATED CORE（総合必修科目）としての一般教育の活性化案を参考にして、この数年間議論に議論を重ねてきたものであります。その結果、わたしどもは「コア」を、人間が、人間をとりまく世界に知的に係わり、働きかけていく際のさまざまな経験や活動の核という意味で規定いたしました。従いまして、コア教養科目による教育は充

実した市民生活を営むため、また指導的人材に求められる必要最小限度の教養・見識を培うことを第一の目的といたします。しかし、同時に、人間にとっての普遍的な知的経験・活動のコア(核)を学ぶことを通して、自己の専攻する学問が、学問全体の中で、また社会との係わりのなかでどのような位置を占めるのか、またそれを学ぶ自己自身はどのように位置づけられるのか、を理解させることができ、これによりまして、専攻教育と有機的に結びついた教養教育の役割を果たすものであります。コア教養科目にこのような性格をもたせることから、当然のことながら、その教育の主眼は、各分野における諸学問の知識内容を網羅的に伝達することにあるのではなく、むしろ、各分野の知識や見解がいかなる問題意識から形成され、その形成にどのような方法やものの見方が働いているかを学ばせるところにあります。

この必須の教養と専攻する学問の位置づけという構造的な目的を遂行するために、人間とその環境世界と係わりを6つの基本的分野に分け、それぞれに対応して6つのコア教養科目を設けました。

Ⅰ．人間と文化（A：思想を中心として、B：文芸を中心として）

Ⅱ．歴史と異文化理解（A：歴史を中心として、B：地域と文化を中心にして）

Ⅲ．現代社会の構造（A：政治・法律を中心として、B：社会・経済を中心にして）

Ⅳ．地域と生命、Ⅴ．数理と情報、Ⅵ．物質の世界

これら6つのコア教養科目を設定した理由は、さまざまなに分化した諸学問の特色・性格・歴史を系統化し、類別することを行った一つの結果であります。多くの学問が、そして現実世界の現代的課題の多くがこれら6つのコア教養科目に関連されて位置づけることができるからであります。ただし、コア教養科目の数が6つであること、またその分け方は固定されたものではありません。将来的には履修方式の変更、コア教養科目の統合や細分、あるいは新しいコア教養科目の開設などによる充実も考えられます。

各コア教養科目の実施については、その目標に即した標準シラバスを教官団の討議に基づいて作成・公表いたします。また、担当教官はその標準シラバスに則りまして、各自の専門性と個性にもとづいた個別シラバスを作成・公表いたします。コアのⅡ「歴史と異文化理解」のA「歴史を中心として」を例にとりますと、標準シラバスにおいて、このコア科目が、①歴史叙述の諸問題、②史料の多様性ならびに批判的活用の問題、③歴史的分析の実践、④歴史と現在、を講義の主たる柱として、人間の一つの普遍的な知的活動である歴史的な探究の何であるかの体得が目的であることを示し、個別シラバスにおいて、たとえば近世日本史専攻の教官は、自らの専門的知識を個別の材料として標準シラバスに即した個性的な講義の概要を明示することになります。

2．「周辺教養科目」はコア教養科目を補強するものとして開設いたします。この場合「周辺」とは特定コア科目の周辺という意味ではありません。むしろ、人間の知的な経験や活動のコアとしての6科目全体の「周辺」という意味であります。周辺教養科目はさまざまな授業形態での個別テーマ科目といえます。コア教養科目の講義においても具体的なテーマを用いることがありますが、そ

れは学問の方法・歴史・特色・社会的役割・学問相互の関連などを具体的に興味深く示すためでありまして、テーマそのものの深い追究を目的としたものではありません。コア教養科目の学習をテーマを深く追究する周辺教養科目の学習へき引き継ぐことは、学生に学問の深さを教え、学問への意欲を刺激できるものと考えられます。また、周辺教養科目の学習は、専攻教育におけるテーマ追究の学習と違って、自らの専門とは異なる分野における具体的なテーマの追究を通して、学問の方法の相違を理解することになり、また自らの専門をよく理解する契機となりえますし、個性的な専門家の育成の上でも、総合的な判断力の向上という点でも、極めて重要な役割を果たしうるものと思われます。

周辺教養科目は、一人の教官が担当する講義（例えば、「人権論」、「認知心理学」、「科学技術論」等）、専門が異なる複数の教官による講義（「環境と人間」、「物質と文化」等）、少人数のクラスで個別テーマについて学習・調査・報告・討論するゼミナール形式のものなど、多様な形で実施いたします。このように多様な内容と形式で実施いたします周辺教養科目には全学の広範な教官が参加しうるというメリットがございます。なお、少人数ゼミナール形式のものとしましては、受講学生を文系あるいは理系特定学部に限定した通常ゼミナール形式のものの他に、学部の枠を越えた広い交友関係や学生と教官との親密な交流の形式を目的とした新しいタイプのゼミナール、わたしどもが「ハウス・ゼミ」と呼ぶものをも開設する予定であります。これは、教師と学生が食住を共にする英国のカレッジをイメージした、学部組織を越えた教育のための教育単位「ハウス」の構想に由来いたします。この種の学生寮を実現することは当分の間困難であると思われますが、ハウス構想の趣旨を活かす方策の一つとして開設されるものであります。

3．コア教養科目は1年次学生を対象に1クラス約150人のクラス指定による必修もしくは選択必修の履修方式を採ります。これに対して、周辺教養科目は1、2年次生を対象に、講義は1クラス平均100人（200人で受講制限）、ゼミは少人数クラスとして通常の選択履修方式で実施いたします。ただし、学期毎の開講科目は固定しないものとします。各年次の学生2700人を3ブロック（文系1、理系2ブロック）に分け、各ブロックを対象に8～9科目を配したものを時間割り上の1本の「周辺の柱」とし、これを各ブロックに対して1年半の間に3～5本、年間トータルで12本の柱を立てることにします。

教養教育科目の履修形態としてこのように原則として必修と自由選択の2方式を組み合わせることによって、充実活性化の期待とともに、相当なスリム化が達成できることになります。具体的な数字をここで詳しく挙げることはできませんが、従来の卒業に必要な一般教育の単位数を通常の選択履修方式による現行開講科目数および開講コマ数でみたすためには、現教養部の文系教官に限って言いますと、かなりの数の非常勤に頼った上でなおかつ一人当たり年間8コマのノルマを要求しております。しかも、ときとして極端な少人数クラスあるいは典型的なマスプロ教育を行わざるをえないのが現状であります。これが今回の改革では、教養教育の必要単位数の1／3強から1／2

をクラス指定のコア教養科目で占めさせることによって、卒業に必要な単位数をかなりの程度削減できることになり、これに伴って教官のノルマもほぼ1／2に減らすことができ、しかも適性規模のクラスでの教育が可能となります。

以上、今回の九州大学における一般教育の改革の中心となりましたコア教養科目ならびに周辺教養科目について簡単にご報告させていただきました。

【2】部　会　発　表

○　人文・社会科学部会

〔座　長〕　　大　分　大　学　　助教授　　船　橋　泰　彦
〔副座長〕　　大　分　大　学　　助教授　　井　村　　彰

《研究発表》　一般教養科目での「資本論」の授業について

九州国際大学　教　授　　三　上　禮　次

1．「資本論」を取り上げる理由

a）古典であること。一般教養は、無用の用といったところがあり、個々の知識を授けるというよりも、学問への接近の仕方を授けるといったことが重要であろうう。この点からすれば、最近の学生は古典を直接に読まない風潮が強いので、敢えて古典を読ませるせることにする。

b）「資本論」は古典であるが、その相当部分は今日にも十分通ずるところがあり、現在社会の分析のツールとして現役の理論書でもある。また今日的にその有効性が問題となっている社会主義理論のルーツともされていて、その意味でも今日的な意義を失っていない。

2．授業の進め方

a）第1時間目に「資本論」の学説史上の位置付け（古典派経済学との関連）、マルクスの哲学、社会主義思想との関連など、および全3部の概要を説明する。

b）それ以降は1行づつ読み上げながら、解説してゆく。たとえば冒頭の「資本主義的生産様式が支配的な社会」の解説に1時間をかけるといった具合である。c）「資本論」が難解とされる理由に、その論理の難解さの他に、100年以上前のイギリスと現在の日本との相違からくる資本主義社会の表象の相違、原文はドイツ語であるため翻訳書に必然的なニュアンスの相違、などがある。その点を補うのは、講義者の義務でもある。

d）以上のように進めてゆくと、年間25回として、第1編商品および貨幣だけで終わりとなる。

3．成績の評価

真面目に授業に出て、真面目にきいていれば、だれでも100点がとれるようにするの基本方針である。そのため評価は試験と出席による。

a）試験について。授業の際に重要な個所に線を引かせておく。試験はそこからだけ出す。資料1

に示すとおり、教科書は必ず持ち込ませるので、学生は当該個所を書き写すだけで良い。実際に真面目な学生は20分位で十分100点の答案ができる。またほぼ50％の学生が100点をとっている。

b）出席について。試験での点はそのままでは成績にはならない。欠席の多い学生は欠席分だけを差し引く。たとえば前期１回も出席しなかった者は試験で100点であっても０点になる。なお年間の講義なので成績は前後期の平均でだすが、単位取得に必要な60点を得るためには、後期に100点をとるとして、前期には最低20点をとる必要があり、それ以下の成績では単位取得は不可能ということになる。したがって出席については毎回出席票を提出させる。

c）アンケートによる出席確認について。通常の出席票の提出では、友情による提出が生ずる。それをチエックすることは至難の業なので、時々アンケート調査を行って、出席票に替える。資料２はそのようなアンケートの１例である。これは学部の授業（都市経済）のゼミ生を連れて毎年韓国調査を行っているが、今の学生が朝鮮問題をあまりにも知らないことに愕然として、学生の知識度をアンケートしたものである。アンケートをやるとまた実質出席が回復する。アンケートは毎年同じなので、その集計結果で時系列的な変化を見ることができる。

次の文章のなかの（　　）のところに適当な語句を書き入れなさい。

1．あるものの有用性は、その物を（　　）にする。

2．そこでこれらの労働性産物に残っているものを考察しよう。それらに残っているものは、同じまぼろしのような対象性以外のなにものでもなく、区別のない人間労働の、すなわちその支出の形態にはかかわりのない人間的労働力の支出の単なる（　　）以外のなにものでもない。

3．社会的に必要な労働時間とは、（　　）なんらかの使用価値を生産するのに必要な労働時間である。

4．その有用性がこのようにその生産物の使用価値に－－－－またはその生産物が使用価値であるということに－－－－表される労働を、われわれは簡単に（　　）と呼ぶ。

5．自立的な、互いに独立の、（　　）の生産物だけが、互いに商品として相対するのである。

6．労働は素材的富の父であり、（　　）その母である。

7．労働は、使用価値の形成者としては、有用労働としては、あらゆる社会形態から独立した、人間の一実存条件であり、人間と自然との物質代謝を、それゆえ人間生活を媒介する永遠の（　　）である。

8．裁縫労働と織布労働とは、質的に異なる生産的活動であるにもかかわらず、ともに、（　　）の生産的支出であり、こうした意味でともに、人間的労働である。

9．平均的に、普通の人間ならだれでも、（　　）、その肉体のうちにもっている単純な労働力の支出である。

10．より複雑な労働は、単純労働の（　　）、またはむしろ何倍かされたものとしてのみ通用し、

11．リンネル＝上着　の価値関係において、相対的価値形態にあるのは（　　）であり、等価形態にあるのは（　　）である。

12．等価形態での第一の特色は、使用価値が、その反対物の、（　　）の現象形態になる、ということである。第三の特色は、私的労働が、その反対物の形態に、直接に（　　）な形態にある労働になる、ということである。

資料　2

アンケート　3

今日はこのアンケートが出席票の代わりになりますから、氏名票はいりません。

次のことのなかで知っていたことには○、知らなかった場合は×をつけてください。なおこれは成績にはかんけいありませんから、正直につけてください。

1．8月15日は、日本では終戦記念日ですが、韓国では光復節といって解放記念日ですので、国民の祝祭日になっています。　56／257＝22％

2．万歳事件から朝鮮の独立運動は始まった。　77／257＝30％

3．日本の植民地支配の時期に、朝鮮人たちは、姓名を日本式に代えさせられた。　179／257＝70％

4．多くの朝鮮人が、強制的に日本に連行され、主に鉱山で働かされ、抗議したり逃亡しようとした人は、すべて殺された。　210／257＝82％

5．第三世代の在日朝鮮人たちは、朝鮮語はまったく話せず、日本人とまったく変わりませんが、就職で今でも差別されています。　179／257＝70％

6．1950年からの朝鮮戦争はいま休戦中です。　119／257＝46％

7．松本清張の「黒地の絵」は朝鮮戦争たけなわの頃の、小倉事件を扱ったものです。　25／257＝10％

《研究発表》　　学問の専門化と一般教育の役割　－戦後の学問思想から学ぶ－

別府大学　教　授　　佐　藤　瑠　威

大学設置基準の大綱化によって、従来の科目区分がなくなり、一般教育はその制度的保障を失った。一般教育は消失しかねない状況にあるが、このような状況を見る時、かっての大学紛争のことが想起される。なぜならば、当時、最も批判の対象となったのは、学問の専門化の傾向が生み出す学問や教育の在り方であったが、この問題は現在でも解決されないまま、今は一般教育のみが批判されているからである。ウェーバーが言うように、学問の専門化自体は、学問の発展の原動力であり、不可避的な傾向である。問題は、専門化過程が進行するにつれて、学問研究の世界が生活世界からかけ離れた特殊な世界となり、タコツボ的な自閉的なシステムの如きものとなっていることにある。学問の専門化の過程は研究の内容を益々特殊化し細分化していき、今日の研究は、もはやそのままでは教育的な意味、すなわち人間形成的な意味をもつことは稀となっている。高度に専門化された現代の研究は、人間形成を事とする教育とますます重ならなくなってきている。大学が研究教育機関であり、大学人の義務があくまで研究者であると同時に教育者であるべきだとすれば、研究と教育との乖離が生み出す問題状況を克服すべく努めなければならない。一般教育担当者は、学問の教育的意味を確立する役割を担う重責を背負っている。たとえ、制度としての一般教育がなくなっても、研究と教育との統合を模索し人間形成に資する大学教育の在り方を求めていかねばならないと思われる。

この問題を考えていく手がかりしとて最も参考になったのは、私の場合は、戦後の近代主義・市民社会派・戦後啓蒙などと呼ばれる人達の学問的スタイルや人となりであった。主として社会科学を専門とするこのグループの人々は、戦後の日本に近代的な主体的人格を形成していくことを共通の問題意識としていた。このような実践的な問題意識を持ちつつも、研究においては、彼らは自らの主観的価値理念に対して自覚的意識的であろうとするウェーバー的エートスを失うことがなかった。戦後日本の根本的な課題を問題意識としてなされた彼らの研究業績は、それ自体が教育的意味を持つものであった。このような超学問的課題を根底に持っていた彼らは、新しい世代の教育をも重視していた。彼らの多くにとって、大学教育という場は研究と等しい重要性を持つものであった。

周知のように、一般教育の目的は、専門の基礎となる教養を養うとともに、公共的な規範意識を備えた自立的個人を育成するという人間形成的な課題をも担っている。この課題を念頭に置いて一般教育に携わろうとした時、戦後日本に近代的な主体的人格を形成することを求めて研究と教育とに情熱を傾けていった彼らの仕事と人格は、最も学ぶところの多いものであった。

《研究発表》　　アメリカの大学における一般教育についての紹介

大分大学　教　授　　深　尾　　誠

昨年の３月から今年の１月までアメリカのテキサス工科大学に在外研究員として滞在したときに、この大学の一般教育がどのように行われているかを知ることができた。ここで紹介するのは、あくまでもアメリカの一大学における事例であるが、平均的なものではないかと思う。テキサス・テック大学はテキサス州ラボック市（Lubbock）にある学生数約２万５千人の９つの学部（農業科学部、建築学部、教養学部、経営学部、教育学部、工学部、家政学部、法学部、医学部）からなる総合大学である。

この大学の一般教育（General Education Requirements）についてのガイドブックを読んでみると一般教育の重要性を強調していることが読み取れるし、また、教職員・学生との話からも一般教育の重要性は当然であると思っていることがうかがわれた。テキサス州法でも、テキサス州の援助を受ける教育機関は "liberal arts, humanities, sciences, political, social, and cultural history のコアカリキュラム" を設置することが定められている。日本では同様の法律は廃止されたが、テキサスではこの法律を廃止する動きはまったくないように見受けられた。

テキサス・テック大学ではこの法律をうけて次のような一般教育科目の必修単位数を学則で定めている。

A．基本的技術

　１．文章によるコミュニケーション(6hours)　２．口頭によるコミュニケーション(3hours)

　３．数学的・論理的推論(6hours)　４．外国語

B．科学と工学

　１．自然(実験)科学(8hours)　２．技術と応用科学(3hours)

C．社会と文化を理解する

　１．歴史的ものの見方(6hours)　２．政治学(6hours)

　３．個人あるいは集団行動(3hours)

D．人文科学と芸術(6hours)

　１．人文科学　２．視覚的およびパフォーマンス芸術

E．体育(2hours)

これらのうち、人文・社会系の一般教育科目に関するC．とD．の内容は次のようなものである。C．の３．とD．１．と２．は、科目数があまりにも多くて掲載することができないので、カテゴリー名のみ掲載している。これをみると日本の人文・社会系の一般教育科目に比べて、そのレパートリーが実に豊富であることがわかる。これが可能なのは、それぞれの専門学部で学生が受講する

ためであるが、時には、受講可能学生数を受講希望学生数が上回り、希望しても受講できない科目があるとのことであった。その際の受講可能な学生の決定にはいくつかの基準があり、高学年の学生などが優先されるとのことであった。

C．社会と文化を理解する

1．歴史的ものの見方（以下の科目から選択）

・1877年までの合衆国の歴史

・1877年以降の合衆国の歴史

・テキサスの歴史

2．政治学（以下の科目から選択）

・アメリカ政府とその組織

・アメリカの公共政策

3．個人あるいは集団行動（以下のカテゴリーに属する諸科目から選択）

・広告　・農業経済学　・人類学　・建築学

・芸術　・芸術と科学　・コミュニケーション研究

・経済学　・教育心理学　・スポーツ科学

・食物と栄養　・家族研究　・地理学　・人間の発達

・人間の発達と家族研究　・健康　・産業工学

・ジャーナリズム　・哲学　・政治学　・心理学

・レクリエーションおよびレジャーにおけるサービス

・スピーチとヒアリングの科学　・社会学　・社会福祉

・女性研究

D．人文科学と芸術

1．人文科学（以下のカテゴリーに属する諸科目から選択）

・人類学　・建築学　・芸術　・芸術と科学の特別セミナー

・古典　・コミュニケーション科学　・ダンス

・英語　・歴史　・人文学　・ラテンアメリカ地域研究

・音楽の歴史と文学　・公園管理と景観建築

・哲学　・政治学　・劇場芸術　・外国語

2．視覚的およびパフォーマンス芸術（以下のカテゴリーに属する諸科目から選択）

・建築学　・芸術　・芸術と科学特別セミナー　・ダンス

・ファッションデザイン　・音楽(応用)　・作曲　・アンサンブル

・音楽理論　・公園管理と景観建築　・劇場芸術

参考までにテキサス工科大学の経営学部の学部教育について簡単に述べる。この学部の学士号をもらうためには基本的に Lower Division Course Requirements(ＬＤ‥上記の教養科目から選択)とUpper Division Course Requirements(ＵＤ‥経営学部が指定する専門科目)をとらなければならない。ＬＤの多くは所属学部以外の学部に行って単位をとってくる(教養部がないため)。教養部はないが、日本の教養学部のような College of Arts and Sciences がありＬＤの多くはこの学部で１・２年生の間にとることが奨励されている(というのはＵＤ科目の中にはあるＬＤ科目をとっていなければ受講できないものがかなりあるため)。

ＬＤには英語、数学、アメリカ合衆国の歴史、外国語、人文系の科目、実験科学(自然系の科目)、体育、政治学（アメリカ合衆国政府、アメリカ合衆国の公共政策)、経済原論、企業経営、会計学入門、ビジネスにおけるコンピュータ、経営統計学などがある。

この経営学部における１・２年生の単位取得例を参考までに以下に記載する。科目名の前の番号は各科目に与えられた番号である。科目数が多い場合は、科目番号のみを記載している。

1st Semester

数学：「1330 数学的分析入門」

英語：「1301 修辞学の基礎」

実験科学：人類学、大気科学、化学、地理学、地質学、物理学の中から１つ選択。

歴史：「2300 アメリカ合衆国の歴史(1877年まで)」

経営学：「1390 企業論」

2nd Semester

数学：「1331 数学的分析入門」

英語：「1302 上級修辞学」

実験科学：人類学、大気科学、化学、地理学、地質学、物理学の中から１つ選択。

歴史：「2301 アメリカ合衆国の歴史(1877年以降)

人文学：芸術(1310 1311 1320 1324 1370 1371)、英語(2301 2302 2307 2308)
古典学(1320)、歴史(1300 1301)、人文学(2301 2302)、
音楽の歴史と文学(1308 2308 2309)、哲学(2300 2320)
の中から１科目を選択。

体育

3rd Semester

情報科学と定量的科学：「2340 ビジネスにおけるコンピュータ入門」
あるいは「2445 ビジネス統計学入門」

会計学：「2300 会計学入門Ⅰ」

政治学：「1301 合衆国政府とその組織」

経済学：「2301 経済原論Ⅰ」

体育

4th Semester

情報科学と定量的科学：「2340 ビジネスにおけるコンピュータ入門」

あるいは「2445 ビジネス統計学入門」

会計学：「2301 会計学入門II」

政治学：「2302 アメリカの公共政策」

経済学：「2302 経済原論II」

経営学、経済学以外から自由選択

アメリカの１つの大学の一般教育について紹介したが、この国際化時代に、これらのことは先刻ご承知という方々が多いこととは思う。しかし、折りに触れて、相対的に自国の教育システムを眺めてみることは意味のあることであると思う。他国の教育システムの長所は積極的に吸収し、自国の教育システムの長所は自信をもって存続させることができるようになることを望むものである。

○ 自然科学部会

〔座　長〕　大分大学　教授　後藤　勝
〔副座長〕　大分大学　講師　藤井弘也

《研究発表》　基礎教育としての数学教育のあり方

九州大学　教授　押川元重

多くの大学で大学設置基準の大綱化に伴う大幅なカリキュラム改革が進められるなかで、数学のカリキュラムも改革の対象となり、その中で数学教育のあり方を含めた再検討の動きが見られる。特に基礎教育としての数学教育については、学生が専門とする領域の学習を進めるために必要な数学能力を身につけるという教育目標がある一方で、他の分野の学習のために奉仕するという目的とは異なる「数学」そのものを学生に理解させるという教育目標もある。しかし、限られた教育時間の中で、この両者をうまく達成する教育の実行は容易ではない。それにもかかわらず、この両者の間の矛盾にどのように対処して教育内容・方法を具体化していくかは、数学教育のあり方を多様で急速な学問の進展と大学教育に対する社会的なニーズの変化を考慮して考えるうえで避けて通れない課題であろう。

大学教育の一般的状況としては、「立派な講義をすれば自ずと学生がついてくる」といって済ますことができない状況にある。そのような状況のもとで、「学生あっての大学」という認識に立って考えるならば、教育内容における学生にとっての必要性、学生の関心・理解力・反応などを重視した教育が求められている。他の教科の教育内容との関連をも考慮して教育内容の多面的な検討を行うことも大切であり、なかでも、教育内容において教える側の一方的な自己満足になっていないかという反省も必要であろう。あれも必要、これも必要ということでは教える内容が膨らみすぎるので、雑な必要論ではだめであり、学生にとっての必要性を緻密に検討することがなければならない。「学生は学問への関心を持って入学したはずである」ことや「理解力は入試で確認されているはずである」ことを前提にできない現実があることを認めて、学生の学問への関心を育成する独自の取り組み、学生の理解力を正確に把握してそれに対応して授業を進めること、加えて、基礎的理解力を育成するための少人数教育や演習を重視することが必要である。学生の反応を無視して授業することは教師の自己満足に陥る恐れをはらんでおり、この点からも学生による授業評価の効果的導入にかかわる研究が急がれる。

数学教育への要求と外国語教育への要求は相似している。外国語教育の場合には、話せる外国語

能力の育成と異文化理解力の育成との間に対立矛盾があり、外国語教育は運用能力の育成だけを目的とするものでよいという極論や、運用能力は英会話学校にまかせておけばよいという極論がみられる。数学教育の場合は、使える数学能力の育成と数学的思考力の育成との間に対立矛盾があり、役に立たない数学教育は不要という極論や、数学は学問の世界における奴隷にだけはなるべきでないという極論がみられる。

数学学習においては他の学問の学習とはちがったいくつかの特色がある。その一つは、数学能力の育成のためには「慣れ」ることが必要であり、そのための時間や訓練が大切であるということである。「慣れ」るための時間や訓練を無視して、学習者の「頭の良さ」だけに頼る数学教育はまちがっている。また、数学理解の道筋は一通りではないことも認めなければならない。同じことを学ぶ場合でも学習者によって、より容易に理解ができる筋みちは異なるものである。数学の１つの内容を独習するとすれば講義による学習に比べて３倍以上の時間が必要となる。このことも数学学習の特色の１つである。しからば、情報（本）が沢山ある時代にあっては、講義はまさに効率的な学習のためにあるということを学生に理解させることが必要である。

数学教育の２つの目標である使える数学能力の育成と数学的思考力の育成、この両者を統一的に追求することは不可能であろうか。数年前からこのような問題意識をもってきたが、最近の数学教育のカリキュラムの検討を通して、これこそが今日の大学数学教育の最も重要な課題であると考えるようになった。例えば、熱力学における完全微分の議論において、特異点がある場合は関数の分岐の議論もでてくる。このように数学以外の分野で高度な内容の数学を必要としている今日、もっと高度でダイナミックな数学教育を創造すべきであろう。ここで高度な内容の数学教育とは、高度と見られている数学内容を容易に理解できる形で教えるということである。また、数学の特徴である論理的厳密性や一般化の有効性を教育することは大事であり、そこに数学的思考のエッセンスを見ることができるが、厳密性の強調や一般化の追求だけが数学ではないことも認めるべきである。多分、数学専攻の学生として受けた教育の影響であろうが、数学教師にとっては学生に定理を示しても証明を与えないと気持ちが落ちつかないものであるが、学生にとっては定理の意味が理解できない段階で証明を示されても無意味であり、単に教師の自己満足に終わりかねない。

使える数学能力の育成やダイナミックな数学教育をめざすならば、数学が使われている場とそこでどのように使われているかを知ることが必要である。研究においては数学と他の学問との交流の必要性が強調されているにもかかわらず大学教育においてはその点が放置されているのではないだろうか。この面からも、数学専攻の学生に対する教育カリキュラムにおいて数学以外の学問の学習を軽視する傾向に疑問を感じる。

《研究発表》　　「化学ばなれ」の現状と課題

大分大学　教　授　　川　野　田実夫

はじめに

演者は教育学部に所属し、一般教育の化学と学部専門教育の分析化学、環境化学等を担当している。若い世代の「化学ばなれ」現象が化学教育関係者の話題に上るようになってかれこれ10年間が経過しようとしている。化学忌避の要因としては　1)公害や環境破壊にみる化学工業のイメージダウン、2)基礎理論に比重が掛かりすぎるために生徒に魅力を感じさせない高等学校の教科内容、3)実験が多く「キャンパスライフ」を楽しむ時間が阻害される大学専門教育、等を挙げることが出来よう。

演者が現在担当している一般教育の受講者は115名である。今回の報告は、これらの受講生に対して開講時に行ったアンケート調査から、化学忌避の状況を報告し、開講後、８週目に実施したアンケート形式の試験結果から、講義を受けることによる受講者の「化学観」、「物質観」の変化について報告する。

積極的受講希望者は20％

化学受講の動機をいくつかの質問で調査した結果、積極的に受講希望をした学生はわずか20％であり、それ以外の回答は、ほとんどが「希望する科目がなかったのでやもうえず化学にした」というものであった。この回答からは、大分大学の一般教育のメニュー不足が指摘されそうであるが、この20％の数字は、センター試験の理科で化学を選択した学生の比率と同数であり、アンケート結果も、積極的受講希望者の受験科目は化学であった。

表１は大分大学の受験生の中で、共通一次試験の理科で化学を選択した受験生の数である。

表１　学部別化学受験者数（1989年、共通一次試験、理科）

学　　部	受験者総数	化学選択者	化学受験者率（％）
教育学部	１２６７	２６２	２０．７
経済学部	１１８９	２６４	２２．２
工　学　部	１９２５	５５８	２９．９

講義の実践報告

「学生は神様である」が、今日の地方大学に求められる命題の一つと考える演者は、今回講義内容を根本的に変え、基礎理論をそぎ落とし、化学史と物質観の変遷を主要テーマにした。これを筆者は「迎合型講義」と呼んでいる。

また、私語と遅刻を防止するために、受講生の座席を固定し、遅刻した学生には、くどいまでの遅刻理由の説明を求めている。

「迎合型講義の評価」

開講８週目に中間試験を兼ねて講義に対する学生の意見、感想をアンケート形式で求めた。代表的なものを原文どおり列記する。（回答者数107名）

１．肯定的意見

- 高校までの授業と違い、化学という学問がどのような課程をおって今に至ったかということが分かっておもしろい。（類似意見52名）
- 時間厳守、私語がないことで、他の講義よりも集中して聞ける。（類似12）

２．否定的意見

- 高校の化学はとても好きで問題を解くのが好きだったが、この講義は基礎だけで面白くない。もっと練習問題を解きたい。（類似11）
- 高校の時に世界史をとっていないので講義が分かりにくい。もっと化学らしい講義をしてほしい。（８名）
- 言わせてもらえば、かなり嫌味な先生だと見受けられる。（講師の人物評価、筆者も同感）

討　論

以上の報告に対して熱心な討論が行われた。討論の柱は化学のみならず、物理、数学等の自然科学離れの現状認識とその課題が中心になった。以下に内容を列記する。

１．高校生の段階で理科系、文科系の選択がなされているために、いわゆる文科系学部進学希望者の自然科学離れが始まっている。

２．大学の教養自然科学教育を困難にしているのは、大学自身にその責任があるのではないか。大学の入試科目の削減が、高校生の自然科学離れを生んでいる現状を認識しなければならない。

３．教師は「従来型」の講義から脱却して、学生の現状に立脚した新しい自然科学の教養教育を模索しなければならない。

《研究発表》　　教員養成学部における一般物理教育教材について

大分大学　講　師　　藤　井　弘　也

現在の教員養成学部は生徒数の減などからくる教員採用率の減少などの問題を抱え、そのカリキュラムの見直しを迫られている。このような中、一般教育の内容の充実はさらに重要となる。

教育学部の学生は、理科専攻でも物理を高校でとっていないものがほとんどであり、多くは、理科さえも十分学習してきていない。また、物理というと難しいもの、実生活には役立たないものという固定観念をもっているものも少なくない。また、理学部や工学部における一般教育の物理においては、専門基礎として力学から始まり量子力学の導入にいたるまでの流れを大切に教育を行っている。この内容を本学部では、理科の学生の専門科目として物理Ⅰから Ⅳという名前で開講している。よって現在においても一般教育においては、特定のテーマのもとに興味深い話を中心に構成している。

ここで学生は物理の講義の中でどのような内容を望んでいるのか、講義の最初の時間にアンケートをとった。その結果をみると、テーマとしては「身近なもの」、その時点で社会的に問題になっているような、興味を感じているものに関する内容を望む声が多かった。また、その他の要望として、ビデオなどを使用してわかりやすく講義を行って欲しいというものが多くよせられた。これらの結果から、メインテーマの他に余談的に「身近な物理現象」を織り込みながら行ってみた。　現在持っている方針として、1年から4年次までいつ履修してもかまわないような、かえって専門を深めていく過程で必要とされる専門外の知識・教養といったものがテーマとして設定できないか、さらに自然科学的な視点が養われるようなものができないだろうかと考えている。

もう一つ、取り上げて考えていかねばならないのが情報教育である。しかし、一般教育でこれを行うことを考えた場合、施設・設備を考慮に入れなければならない。現状では、本学では担当者と受講者数との関係から、実習講義形式は難しい状況であるといえる。そこで、今回は本学部で行うことのできる教育の一例として、現在行なっている理科専攻の学生対象の一般教育としての学生実験のテーマの中から、手法などの点で難しいものとして「気柱の共鳴」を選んで、パーソナルコンピュータを教材に利用してみた。新設置基準にコンピュータ教育を含む実験が必修として科されていることもあり、学生が現場でコンピュータを教材としてとりあげるための参考としての意義も考え実施した。

このような取り上げ方を含め、情報教育を一般教育で行うための準備を行っていくべきであると考える。

○ 外国語部会

〔座　長〕　大分大学　教授　楠本　宏
〔副座長〕　大分大学　助教授　松田修明

《研究発表》　魅力ある語学教育／学習のために　初修外国語新カリキュラムについて

琉球大学　助教授　吉井巧一

外国語学習とは、単に外国語の運用能力を身につけることだけではない。異文化間のコミュニケーションや問題解決能力を獲得することも、学習目標の中に含まれている。流動的な現代では、幅の広い教育目標をたてる必要があろう。目的、関心分野などに合わせてできるだけ多様な授業科目を継続的（4年間）に提供すること。また、初級から上級まで系統的、総合的に学ぶ機会も与えられなければならないだろう。今こそ、時代と社会の進展に対応した、学生や社会の多様な要請に応えられる（初修）外国語教育のカリキュラムが求められていると言えよう。

琉球大学初修外国語（ドイツ語、フランス語、スペイン語、中国語、インドネシア語、ロシア語、朝鮮語）

新カリキュラム（1994年4月より実施予定）新旧授業科目対照表（ドイツ語を例として）

改革前		改革後	
ドイツ語Ⅰ(2)	ドイツ語Ⅴ(2)	基礎ドイツ語Ⅰ(2)	初級ドイツ語会話(2)
ドイツ語Ⅱ(2)	ドイツ語Ⅵ(2)	基礎ドイツ語Ⅱ(2)	ドイツのことばと風物(2)
ドイツ語Ⅲ(2)		基礎ドイツ語Ⅲ(2)	ドイツ語講読演習(2)
ドイツ語Ⅳ(2)		基礎ドイツ語講読(2)	応用ドイツ語演習(2)
			ドイツ語特演(2)

	前　期	後　期	
1－4年	基礎○○○語Ⅰ（週2回2単位）	基礎○○○語Ⅱ（週2回2単位）	（必修）
2－4年	基礎○○○語Ⅲ（週2回2単位） ○○○のことばと風物（週1回2単位） 初級○○○語会話（週1回2単位）	基礎○○○語講読（週1回2単位） 応用○○○語演習（週1回2単位）	（自由）
3－4年	○○○語講読演習（週1回2単位）	○○○語特演（週1回2単位）	

基礎ドイツ語Ⅰ，Ⅱ，Ⅲについては現行どうり週２コマ２単位（30時間１単位）とする。その他の科目については週１コマ２単位（30時間２単位）とする。すなわち２年前期より週１回の提供科目を新設することによって

- 時間割編成上（週１回だけでよいため）学生が履修しやすくなる。
- （提供科目に多様性が出るため）現状では初修外国語を１年間、４単位の履修をもって終える学生が大多数であるが、学生の関心を持続させ継続的な学習に誘うことができる。
- 提供科目が増えても（時間的には）教官の負担が増えない。

基礎ドイツ語Ⅰ，Ⅱ，Ⅲ（週２回１年半、計６単位）の教育／学習目標：

１、簡単な日常会話（平易な日常的コミュニケーションができる）

２、基礎的な読解力（易しい読み物を辞書をつかって理解できる）

３、文化／社会の理解（生活様式、基本的な文化的／社会的背景などを知っている）

４、初級文法の概観（基礎的な構文を理解している）

ここでは他者との接触を通じて自他の世界を知覚し、新しい世界を構築していく可能性を開くことが求められねばならない。「未知のものに対応する態度の決定と行動についての学習や演習とその経験は異文化理解の鍵であり、また逆にそれによって喚起される自身の異化作業や自己理解は、外国語であればこそ可能な教育、学習上の意義であろう。」（近藤弘「大学設置基準の改訂と外国語教育」さらに学習外国語未知のもの（初修外国語）であるほど、その効果は大きいと言えるであろう。

またカリキュラムの見直しとならんで、以下のような授業改善のための具体的提言を行いたい。

１、教育／学習目標を現実的、具体的に設定する。

２、提供科目に多様性を持たせる。

３、シラバス（年間授業計画）、（学生による）授業評価を実施・公開する。

４、全学共通標準テストを実施し、成績評価の一基準とする。

５、教官の教育技能の向上をはかる。〝faculty develoment〟

（教授法や学習理論の勉強、相互授業参観。昇任等の際にも考慮する。カリキュラムを変えても、教師が変わらなければ授業は変わらない。）

参考資料：

畔上泰治・吉井巧一　「第２外国語教育の現状と問題点　－　琉球大学におけるアンケート結果から」『Southem Review』№６　S.61－81　沖縄外国文学会　1991.

近藤　弘　「大学設置基準の改訂と外国語教育」『千葉工業大学研究報告　人文編』№30　S.15－24　1993

領域	科目	科目番号	科目名	単位数	週時間	受講年次	学期	講義内容	備考
基幹領域	外国語	外11	基礎ドイツ語Ⅰ	2	(0－4)	1	前	はじめてドイツ語を学ぶ者のための入門クラス。正確に発音し、聞き、話し、読み、書く技能の基礎的で総合的な訓練を行う。 1)簡単な日常会話の修得、 2)基礎的な読解力の理解 3)社会／文化の理解 4)基礎文法の理解を学習目標とする。	
		外12	基礎ドイツ語Ⅱ	2	(0－4)	1	後	基礎ドイツ語Ⅰの続き。	基礎ドイツ語Ⅰを既に履修していること。
		外13	基礎ドイツ語Ⅲ	2	(0－4)	2	前	基礎ドイツ語Ⅰ.Ⅱで修めた知識を基に、語彙を拡大し、基本構文についての理解を深め、総合的なコミュニケーション能力の基礎を養成する。	基礎ドイツ語Ⅰを既に履修していること。
		外14	基礎ドイツ語講読	2	(2－0)	2	後	基礎ドイツ語Ⅲの続き。易しい読物を教材とし、読解力を養成する。	

領域	科目	科目番号	科目名	単位数	週時間	受講年次	学期	講義内容	備考
基幹領域	外国語		初級ドイツ語会話	2	(2－0)	2	前	各種視聴覚教材を活用しながら、聞き取り訓練及び口頭による基礎的表現能力の訓練を行う。	基礎ドイツ語Ⅰ.Ⅱを既に履修していること。
			ドイツのことばと風物	2	(2－0)	2	前	特定のテーマ（アクチュアルな社会及び文化現象など）にそって、さまざまな資料を活用しながらその国の風俗・習慣・歴史・文化に対する理解を深める。	基礎ドイツ語Ⅰ.Ⅱを既に履修していること。
			応用ドイツ語演習	2	(2－0)	2	後	基礎ドイツ語Ⅲの続き。会話・スピーチ・作文等の実用的コミュニケーション能力の訓練を行う。	
			ドイツ語講読演習	2	(2－0)	3	前	種々の教材を講読し、内容を全体的に把握することに重点をおいて、読解力を養成する。	
			ドイツ語特演	2	(2－0)	3	後	語学演習をゼミナール形式によって行う。	

《研究発表》　　改革の中の英語教育　－授業で実践してみたいこと－

大分大学　教　授　　河　上　敏　博

英語は日本語と同様言葉であるから、その主たる機能はコミュニケーションの具である。英、米、カナダ、オーストラリア、ニュージーランド、南アフリカでは、英語で日常生活を送っている。更に多くの旧大英帝国植民地、その他の国々が英語を学んでいる事実から考えて、英語はすでに国際共通語としての重要性を帯びているといつてよい。世界市民の一員とし、日本人が英語を学ぶ所以である。諸国民の相互理解、学術文化交流、国際平和にいささかなりとも貢献するためには共通語を学ぶことが不可欠だからである。

我国は幕末、明治の早くから国家の近代化のために英語教育に尽力してきた。明治20年頃まで高等教育のほとんど全科目が外国人教師により外国語で主として英語で実施されたのである。その後、日本人教師にかわったとはいえ、戦時中は別にして、旧制中学で週６時間、旧制高校で第一外国語週12時間、第二外国語６時間の多きに渡って、英語が教えられたのである。ところが戦後長らく週４時間だった中学英語が週３時間に減り、今度、大学教養課程の外国語８単位の枠がはずれたことは、この国際化時代にまことに残念なことと言わねばならない。

もとより、実用になる程の英語力が普通の学校の授業で養成しうると考えるのは語学に対する迷信であろう。例えば、時間数だけ見ても、中、高、大での英語の合計時間は毎日英語の中で生活する人々の100日にも満たない時間なのである。にもかかわらず、学生の英語力をつけるため明治以後絶えず教育法が追求されてきた。１つは、正則と呼ばれた外国人教師による直接教授法、１つは変則と呼ばれた日本人教師による訳読法である。新渡辺稲造によると「変則教授法にも称賛すべき点がある。一般にこの方法で教育を受けた学生は意味をよく考えずに次から次へとセンテンスを「おうむ」のように機械的に繰り返して読むことを教えられた学生よりも英文を明確に理解できることである。正則教授法は読む機械の如く、常にネジを巻いて動かすことになり、正しい英語の発音はできても知る価値のあることは少しも習得していないという場合が珍しくないのである」と述べている。我国近代化の過程で、英語に習熟し、外国事情を知るために留学のできない多くの貧乏教師も学生も共に書物を読むしかなかったであろう。結果的には読解中心になったのも当然である。

現在は多くの人々が或いは仕事、或いは留学で海外に出掛ける時代となった。通信放送器械の飛躍的発達により、海外の情報も著しく増加して来ている。読むことも聴くことも必要とされる時代になりつつある。

とはいえ英語の読解にせよ、聴解にせよ簡単に力がつくものではないのも事実である。上智大の渡辺昇一教授がおっしゃつているように学校教育の英語は、「英米の知識階級相手の知的散文、或いはトマス・ハーディ程度の小説を１ページ30分かかろうが、１時間かかろうが正確に読めること、和英を頼りでもよいから筋の通った英文を書けること、ごくごく初歩の会話ができること」が目標

なのである。「１時間１ページでも正確に読める潜在能力を獲得した青年ならしかるべきチャンスを与えれば、その能力を顕在化させる」ことができるのである。英語も含めて学校教育はすべてまさに潜在能力の養成が目標なのだということを忘れてはなるまい。近々私も小人数クラスを担当することになりそうである。早稲田の東後勝明教授が、最近出版された書物にリスニングの苦い経験をお書きになられている。程度こそ違え、私も蛮勇をふるって「ごくごく初歩の」難しいリスニングを小人数クラスで実践してみたいというのが今日の発表である。

《研究発表》　　「音読」を重視した日本語教育について

別府大学　講　師　　坂　口　淳　志

常日ごろ、1年生と接して強く感じる事は、「音読」する習慣が出来ていないということである。大学進学予備コースとしての日本語課程では、どうしても筆記試験対策に重点がおかれるので止むをえない面もあるが、漢字文化圏に含まれる中国人、韓国人のためには、「音読」は、大変重要であり、1年生のうちに習慣づける事大切である。

そのため、どのような教材を使用するか、いろいろ考えたが、向田邦子さんの作品である『思い出トランプ』（新潮文庫）を採り上げることにした。その理由は以下の通りである。

1．短編小説であり、週に1コマ（90分）という時間的制約に対処しやすい。

2．新潮カセットブックに『思い出トランプ』から4つ採用されている。

3．ポケットサイズである上、安い。

4．作品としての価値が高く（直木賞受賞）、またおもしろい。

4月から7月までに使った作品は、

① かわうそ　（奈良岡朋子）　23分37秒

② だらだら坂　（渡辺美佐子）　24分15秒

③ 大根の月　（栗原　小巻）　23分

④ 花の名前　（加藤　治子）

授業方法は、カセットブックを予めダビングして学生に渡し、予習の段階でテープを参考にしながら3回以上音読させるようにした。現在1クラス10人ぐらいの少人数クラスなので、授業中は1人1人に音読させ、音読練習をしたかどうかのチェックと内容について理解出来ているかの質問を行った。そして1つの短編が終了するごとに学生1人1人と時間を打ち合わせて、研究室で出来るだけカセットブックの録音内容をまねた形で音読してもらい、漢字の読み方、発音、間の取り方、内容にあった声の使い方等をチェックした。もし、くよ出来なかった場合は、日を改めてパスするまでやった。また学生が読むときは、私の本と学生の本を交換し、おかしい所があったら、学生の本に印をつけ、終了後、その印を頼りに注意すべき所を指導することにも気を配った。それから時々、学生達の音読した声をテープにとり、声優の模範的な読みと比べて、どうであるか学生達に自己チェックをさせた。これらの方法は確かに時間はかかるが、学生は自分の日本語を客観的にとらえることの大事さと、目、口、耳、を同時に使うことが、言葉を学ぶ点でいかに大切であるかを体験出来たと思う。

《研究発表》

日本文理大学における外国語教育課程
－「一般教育等」の大幅な自由化の中で－

日本文理大学　助教授　　津　田　克　巳

去る平成３年７月１日の大学設置基準の省令改正を受けて、大分市の私立・日本文理大学ではカリキュラムの大幅な変更に踏み切った。一般教育科目等と専門教育科目との区別は従来のまま残されたが、一般教育科目等については履修方法がほぼ完全に自由化され、それまで必修または選択必修とされた外国語科目ならびに保健体育科目がすべて選択科目となった。例外は、教職課程における必修科目を除くと、工学部の一般教育科目等に新たに設けられた“基礎教育科目”（数学関係、２科目８単位必修）だけであり、これは商経学部にはない。両学部を通じ＜卒業の要件＞として一般教育科目等に関しては任意の科目を合計52単位以上修得すればよい。従って“英語の取得単位はゼロ”でも卒業は可能となる。この極度なまでに新しい教育課程は平成４年度から実施された。しかも新入生のみならず当時の在学生にまで一律に適用された。

本学の一般教育科目等の教員にとってこういった履修方法の急激な変更が不本意なものであったのは言うまでもない。とりわけ必修から選択へ言わば“格下げ”されることになる外国語と保健体育の教員は大いなる危機感の下に再三にわたって反対意見を表明し、よりゆるやかな改革路線をとるべきことを申し入れた。例えば外国語に関しては、英語必修とまでは言わないにしても、せめて商経学部において英語、ドイツ語、フランス語、中国語の中から１言語８単位を選択必修とし、“基礎教育科目”として設置すること、あるいは両学部を通じて新しい教育課程の適用は平成４年度の新入生からにすることなどを提案した。だが大学当局はこれらの意見を一顧だにせず、強引にかつ機械的に上述の極端な自由化を推し進めた。そして１年半が経過した。

新しい教育課程が導入されて以来、学年初めの一般教育等オリエンテーションにおいては旧課程の履修方法を“模範的”なものとしてすすめている結果、外国語教育課程においては、少なくとも新入生に関する限りまだ当初予想されたほどの受講者数の減少は見られない。特に英語は１年・２年ともに履修者数はほとんど減っていない。しかし他の科目、従来のいわゆる“第２外国語”では受講者数の顕著な減少傾向が見られ、とりわけ２年次になると学習者数が激減する。その際、学生側の科目選択の基準となるのは何よりも単位認定の難易度（担当教官がたやすく単位を与えるかどうか）であると考えられる。

かくして日本文理大学における外国語の履修率は“遅くとも確実に”減少しつつある。このような新しい、厳しい状況の下で、外国語教員は授業のありかたを今まで以上に真剣に考えて行かねばならない。より魅力的な授業を提供して少しでも多くの学生を引き付け、引っ張って行くことが求められるであろうし、授業に対する学生側のさまざまな要求に可能な限り応じて行くことによって受講者数の減少をくい止める努力をするのは教員としての義務でもあろう。外国語教育課程の今後の運命はそのあたりにかかっていると思われる。

○ 保健体育部会

〔座　長〕　大分大学　助教授　小池保雄
〔副座長〕　大分大学　助教授　島田義生

《研究発表》　大学生の一般的価値観とスポーツ意識

大分県立芸術文化短期大学　講師　洲　雅明

〈目　的〉

本研究は、大学生のスポーツに関するニーズ（needs）やウォンツ（wants）を知るためにアンケート調査を行い、ベネフィットセグメンテーション（便益分析）によって①大学生と大学生以外（一般）の成人、②大学生の男子と女子の間のニーズやウォンツの違いを考察しようとした。スポーツに関するベネフィット（便益）の構造化を行い、大学生と一般、大学生と一般、大学生男子と女子において便益期待の比較を行った。それにより、大学生がスポーツに対してどのような面で期待しているのかを明らかにすることで、大学における体育実技やサークルなどの課外活動、また、様々なスポーツ活動の場に役立てるための基礎資料を得ることを目的とした。

〈方　法〉

1．アンケートの概要

問1から5までは、個人的な属性やスポーツ実施に関する内容を選択肢、または数の記入で回答してもらった。問6は、スポーツに関する便益の内容で各質問に対して、「非常に重要である」から「まったく重要でない」まで5段階選択肢によって回答を求めた。便益とは、こうだったら自分にとって都合がよいという「スポーツ消費者」にとっての利益のことで、武隈（1991）の質問尺度を援用した。

2．調査手順

大学生は、大分市内の大学2校（大分大学、大分県立芸術文化短期大学）において、一般は大分市（人口41.6万人）全域に渡って性、職業、年齢などが偏らないように配布した。調査実施期間は1993年6月2から18日であった。

3．分析方法

問1から5までの内容に関しては、比較を①大学生と一般、②大学生男子と女子について単純集計を行い人数に対する割合（%）を算出した。問6に関しては、因子分析を用いてスポーツに

関するベネフィット（便益）因子の抽出を行い、各因子の抽出を行い、各因子においての①大学生と一般、②大学生男子と女子の比較を因子得点によって行った。

〈結果と考察〉

1．サンプルの属性とスポーツ実施に関する実態

サンプルの属性とスポーツ実施に関する実態を表1から考察してみた。

休日に関しては、「8日以上」において大学生が約5割であるのに対し、一般は3割であった。また、「3日以下」や「4～5日」大学生は約3割であるのに対し、一般は4割であった。大学生男女で比較した場合、「3日以下」で女子が多くなっているのが特徴的であった。ゆとりに関しては、「ある」と答えた人が一般、大学生とも6割を越えた。「ほとんどない」と回答した人は、大学生に比べ若干一般が多かった。大学生男女で比較した場合、ほとんど差はみられなかった。体力に関しては、一般と大学生でほぼ同様な傾向を示した。「普通」と回答した人が、6割強、「不安」と回答した人が「自信がある」と回答した人より多い結果であった。スポーツの実施に関しては、「行った」と回答した割合が一般よりも大学生において多い結果であった。大学生男女で比較した場合、男子の方が多い結果であった。スポーツの費用に関しては「10万円以上」で差がみられ、一般の方が大学生よりも多い結果であった。大学生男女で比較した場合、男子の方が多い結果であった。

以上をまとめると、大学生は一般に比べ肉体的にも精神的にも暇、ゆとりがあるように見受けられる。大学生男子は、若さゆえに体力的に自身があり、スポーツも全体的に行っているが、大学生女子は一般と同程度である。また、大学生男子は女子に比べてスポーツに対してお金を費やしているようである。

2．スポーツに関するベネフィット（便益）について

(1) 因子構造について

表2に示すように、因子分析の結果、9因子を抽出した。これら9つの因子の命名はスポーツに関する便益の項目との関係を因子負荷量の大きさによって検討、解釈することにより行った。

(2) 大学生と一般の比較

図1にスポーツに関する便益が大学生と一般によってどのように異なるかを示した。その結果、第2因子「スポーツ情報」、第3因子「スポーツ仲間」、第5因子「トレンド」、第6因子「個別的・合理的トレーニング」、第7因子「指導者・スポーツプログラム」、第8因子「技能向上」において有意な差が認められた。大学生は、一般と比べ「スポーツ仲間」、「トレンド」、「個別的・合理的トレーニング」「技能向上」に関して便益期待が大きく、「スポーツ情報」、「指導者・スポーツプログラム」に関して便益期待が小さいことが明らかになった。

(3) 大学生男子と女子の比較

図2にスポーツに関するベネフィット（便益）が大学生の男子と女子の間でどのように異なっているかを示した。全体的にみると、男子の方が女子よりも因子間で差があり、「スポーツ仲間」「個別的、合理的トレーニング」「技能技能向上」などの得点が大きな因子、「アクセサビリティ」「スポーツの情報」「スポーツの効用」「指導者・スポーツプログラム」などの得点が小さな因子に別れた。男子は、それだけ片寄った内容に関して便益期待が大きいことが考えられる。

男子は、「スポーツ仲間」「個別的、合理的トレーニング」「技能技能向上」に関して女子よりも便益期待が大きく、女子は、「スポーツの効用」「指導者・スポーツプログラム」に関して男子よりも便益期待が大きいことが明らかになった。

〈まとめ〉

スポーツに関する便益をみたところ、大学生においては、友人・知人との親睦を図ることを念頭に置きながら、特に男性においては、それぞれの個人にあったプログラムを用意し、しかも技能の向上が図れるものであること、女性においてはシェイプアップなどの効用が得られるものが期待が添うことが明きらかになった。

表1　標　本　の　構　成

			男子（%）	女子（%）	大学生（%）	一般（%）
1．性　　別		男　性	133	0	133 (29.2)	513 (43.1)
		女　性	0	322	322 (70.8)	678 (56.9)
2．年　　齢		10代	82	280	362	29 (2.4)
(18歳以上を対象)		20代	51	42	93	344 (28.9)
		30代	0	0	0	311 (26.1)
		40代	0	0	0	344 (28.9)
		50代以上	0	0	0	163 (13.7)
3．職　　業	自営業	農林漁業	0	0	0	8 (0.7)
		商工サービス業	0	0	0	125 (10.5)
		自由業	0	0	0	22 (1.8)
	被傭者	管理職	0	0	0	64 (5.4)
		専門・技術職	0	0	0	173 (14.5)
		事務職	0	0	0	288 (24.2)
		技能・労務職	0	0	0	162 (13.6)
	無　職	主　婦	0	0	0	281 (23.6)
		学　生	133	322	455	0 (0.0)
		無　職	0	0	0	37 (3.1)
	N．A．		0	0	0	31 (2.6)
4．休　　日	月に8日以上		70 (52.6)	177 (55.0)	247 (54.3)	400 (33.6)
	月に6～7日		25 (18.8)	53 (16.5)	78 (17.1)	265 (22.3)
	月に4～5日		29 (21.8)	47 (14.6)	76 (16.7)	321 (27.0)
	月に3日以下		9 (6.8)	45 (14.0)	54 (11.9)	169 (14.2)
	N．A．		0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	36 (3.0)
5．ゆとり	ある	かなりある	21 (15.8)	42 (13.0)	63 (13.8)	152 (12.8)
		ある程度ある	64 (48.1)	166 (51.6)	230 (50.5)	588 (49.4)
	ない	あまりない	37 (27.8)	88 (27.3)	125 (27.5)	307 (25.8)
		ほとんどない	11 (8.3)	24 (7.5)	35 (7.7)	138 (11.6)
	N．A．		0 (0.0)	2 (0.6)	2 (0.4)	6 (0.5)
6．世帯構成	1人世帯		67 (50.4)	49 (15.2)	116 (25.5)	114 (9.6)
	1世代世帯		1 (0.8)	6 (1.9)	7 (1.5)	171 (14.4)
	2世代世帯		40 (30.1)	173 (53.7)	213 (46.8)	715 (60.0)
	3世代世帯		15 (11.3)	77 (23.9)	92 (20.2)	149 (12.5)
	その他世帯		9 (6.8)	16 (5.0)	25 (5.5)	36 (3.0)
	N．A．		1 (0.8)	1 (0.3)	2 (0.4)	6 (0.5)
7．体　　力	自身がある		34 (25.6)	30 (9.3)	64 (14.1)	158 (13.3)
	ふつう		81 (60.9)	214 (66.5)	295 (64.8)	767 (64.4)
	不安がある		18 (13.5)	78 (24.2)	96 (21.1)	258 (21.7)
	N．A．		0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	8 (0.7)
8．スポーツの実施	行った		125 (94.0)	243 (75.5)	368 (80.9)	808 (67.8)
(過去1年間)	行わなかった		8 (6.0)	79 (24.5)	87 (19.1)	378 (31.7)
	N．A．		0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	5 (0.4)
9．スポーツの費用	10万円以上		16 (12.0)	11 (3.4)	27 (5.9)	156 (13.1)
(過去1年間)	5万円以上10万円未満		21 (15.8)	13 (4.0)	34 (7.5)	82 (6.9)
	1万円以上5万円未満		50 (37.6)	44 (13.7)	94 (20.7)	257 (21.6)
	1万円未満		23 (17.3)	106 (32.9)	129 (28.4)	218 (18.3)
	使わなかった		20 (15.0)	133 (41.3)	153 (33.6)	387 (32.5)
	N．A．		3 (2.3)	15 (4.7)	18 (4.0)	91 (7.6)

表2　便益の因子構造

（バリマックス回転後の因子負荷量）

第1因子：アクセサビリティ（寄与率　29.7%）	
シャワー・ロッカー・更衣室・トイレなどの充実	.788
施設が混みすぎていないこと	.769
施設の職員や従業員の態度が良いこと	.767
スポーツをする場の雰囲気が快適であること	.754
スポーツをするためにあまりお金がかからないこと	.692
安全にスポーツを行えること	.661
スポーツをする施設や場所までの交通の便がよいこと	.635
第2因子：スポーツ情報（寄与率　8.2%）	
いつどんなスポーツ教室やスポーツ行事が行われるのかという情報	.812
どこにどんなクラブや同好会があるのかという情報	.789
どこにどんな指導者がいるのかという情報	.684
どこにどんなスポーツ施設があるのかという情報	.682
練習やトレーニングの方法、に関する科学的な知識などの情報	.672
スポーツ医学的な検査や相談が気軽にできること	.512
第3因子：スポーツ仲間（寄与率　7.4%）	
スポーツにより地域・近隣の人々との交流を深めること	.797
スポーツにより友人・知人との親睦を図ること	.784
スポーツにより職場・仕事関係の人々と交流を深めること	.762
スポーツにより家族とのふれ合いを増やすこと	.695
第4因子：スポーツ施設・スポーツクラブ（寄与率　5.8%）	
スポーツする場所（スポーツ施設）が身近にあること	.761
場所（施設）探しで苦労しなくてすむこと	.755
一緒にスポーツをする仲間の集まりが身近にあること	.694
施設にスポーツ用具や器具が整っていること	.593
第5因子：トレンド（寄与率　4.2%）	
流行している又は流行しそうなスポーツを行うこと	.858
流行やブランドもののスポーツウェアやスポーツ用品を使うこと	.857
高級な施設でスポーツすることで高級感を感じること	.845
スポーツ後に、お茶やお酒を飲んだりすること	.438
旅行先などで、好きなスポーツをすること	.418
第6因子：個別的・合理的トレーニング（寄与率　3.4%）	
自分のペースで練習やトレーニングができること	.773
自分にあった内容の練習やトレーニングができること	.764
練習やトレーニングを継続的に行うこと	.666
練習やトレーニングを計画的に行うこと	.646
第7因子：スポーツの効用（寄与率　3.2%）	
スポーツによって体力を維持・向上させること	.794
スポーツによって健康を保つこと	.794
スポーツによる美容や肥満解消（シェイプアップ）	.653
スポーツによってストレスの解消や気晴らしをすること	.570
スポーツを楽しむこと	.375
第8因子：指導者・スポーツプログラム（寄与率　2.9%）	
指導者が技術的にすぐれ、積極的に技術指導してくれること	.712
健康・体力作りについて実際的な方法を指導してくれること	.694
指導者がグループ活動の楽しさを指導してくれること	.673
気軽に参加できるスポーツ教室・行事が開かれること	.486
第9因子：技能向上（寄与率　2.5%）	
スポーツの技能や記録を向上させること（うまくなること）	.692
ひとつのスポーツ種目を徹底的に行うこと	.622
競技成績や技能水準に対して、表彰や認定を受けること	.569

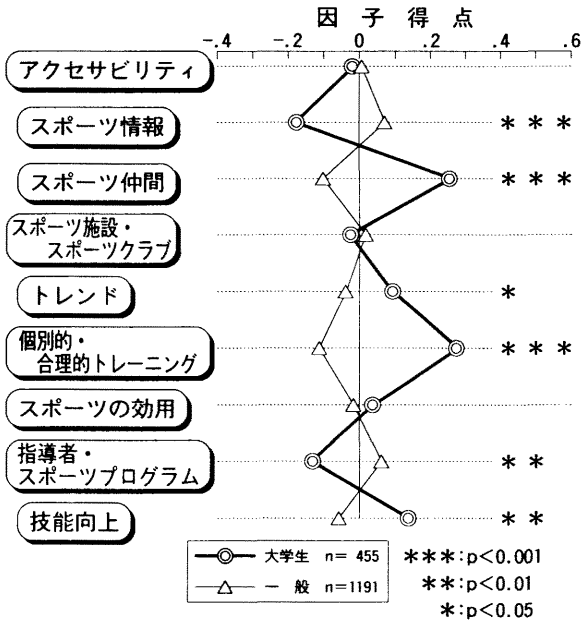

図9 大学生と一般の
スポーツに関する便益期待の実態

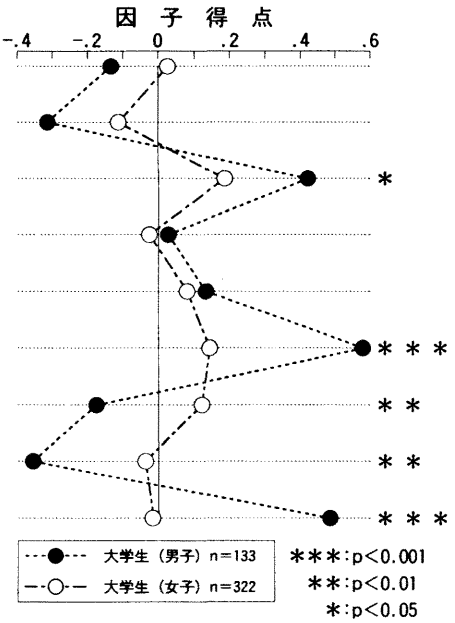

図10大学生男女の
スポーツに関する便益期待の実態

《研究発表》

大分大学における一般体育再編成の現状
－身体・スポーツ科学の方法－

大分大学　教　授　　古　城　建　一

本大学では平成６年度から新教育課程による教養教育の実施をめざして準備が進められている。保健体育分野でも科目名称の変更を含め、新しい教育課程について検討を進めているので、その状況を報告し併せて教育課程変更の意味づけを行うことにする。

大分大学の保健体育担当者は経済・工学・教育の３学部に分属しており、授業も各学部が独自に行っているため様々な矛盾を抱えている。しかし、平成６年度からはこれを廃し、３学部オープンの授業として実施する。オープンとは、ある学部が開講する授業を他学部の学生が履修でき、そこで認定された単位が所属する学部の単位として認定される仕組みをいう。オープン化を実現するためには、３学部門で科目名称や単位の認定方法などを統一する必要がある。現在のところ、オープン化のための条件を整備するため次のことが検討され合意に達している。

科目名称を保健体育から「身体・スポーツ科学」に変更する。「身体・スポーツ科学」は必修と選択に分け、それぞれに授業題目を設定する。個々の授業題目名は従来のスポーツ・運動種目名を充当する方法を廃止し「主題」で表すことにする。必修は２単位とし、選択２単位までを卒業に必要な単位として認めることにする。必修の履修学年は１年次とし選択は２年次以降とする。従来の講義および実技による授業を「演習」に改め、30時間１単位とする。

講義・実技の区別を廃止し演習形式で実施する関係で独立した講義がなくなる。その代替として一般教養科目のなかの自然分野および社会分野に主題別授業を選択必修として開設する。講義題目は「現代社会と健康・体力」「現代社会とスポーツ」などを予定している。

以上の変更は、本大学体育教官（一般体育担当および教員養成課程担当）が過去２年にわたって進めてきた検討の結果、達した結論である。結論が出るまでの間、次の諸点から検討がなされたので以下に紹介する。

青少年をとりまく現在のスポーツ状況の分析から「自分自身が健康や身体形成、スポーツ実践を自らの頭で考え、選択・決定できるような学生」の育成が大学体育の使命であること、そしてこの使命はスポーツ・他の運動文化やその科学を題材として営まれる授業において果たされるという基本的な認識を得た。翻って、一過的・表面的なスポーツの面白さに埋没しがちな学生の実状を考えたとき、我々大学体育教師は今、彼らに何を教えることができるの、また教えるべきなか、さらにどのような方法がよいのかなどを、改めて考える必要が出てきた。

以上の他、学生から見た体育、教師自身の授業観や授業の事情、その他を検討した結果、高度かつ多様な発展を遂げつつある体育関連諸科学を「身体とスポーツの科学」の観点から再編成し、授業の目標、教育内容・方法などを具体的につかみ直した上で授業を行うべきだと考えた。こうした考え方を形に表す努力のなかで、上記のような新しい体育科の教育課程が発想された。